

高城町文化財調査報告書 第1集

じょう が お  
城 ケ 尾 遺 跡

ゴルフ場建設に伴う発掘調査報告書

1989

宮崎県北諸県郡  
高城町教育委員会

## 序

この報告書は、レインボー観光株式会社が行なったゴルフ場造成工事に伴い、高城町教育委員会が実施した高城町大字石山字城ヶ尾4474番地に所在する城ヶ尾遺跡の発掘調査の記録であります。

今回の調査は、クラブハウス及びカート格納庫建設部分の1480m<sup>2</sup>を対象として実施したもので、縄文時代から平安時代にかけての数多くの貴重な資料を得ることができました。

今後、これらの貴重な資料が、町民各位の歴史研究や文化財保護に対する理解のための一助になればと思う次第であります。

末筆ながら、遺跡の調査及び整理、本書の作成に際し、ご協力、ご理解を賜わった各機関、町民各位の皆様方に深く感謝申し上げる次第であります。

平成元年3月

高城町教育委員会

教育長 山 下 英 俊

## 例　　言

1. 本書は、ゴルフ場のクラブハウス建設に伴い、昭和62年3月～7月に実施した城ヶ尾遺跡・山路遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、高城町教育委員会が主体となり、一次調査は県文化課主任主事長津宗重・面高哲郎・北郷泰道、二次調査は町嘱託寺師雄二が担当した。
3. 調査組織は次の通りである。

調査主体　高城町教育委員会

教　育　長　山下英俊

社会教育課長　内山　栄（昭和61年度・昭和62年度）

社会教育課長　中村真琴（昭和63年度）

主事　広池洋三（担当）

調査員　県文化課主任主事　長津宗重

主任主事　面高哲郎

主任主事　北郷泰道

町嘱託　寺師雄二（現　山田町教育委員会）

4. 遺物の復元・実測図・トレースは、富永優子・増田慈子・田原辰子に協力を頂いた。
5. 本書の執筆は、広池・面高・寺師・長津が分担し、文責については目次に明記している。
6. 本書の編集は長津が当った。
7. 土器の色調は農林省農林水産技術会事務局監修の標準土色帖による。本報告の方位は磁北である。またレベルは海拔絶対高である。

## 本文 目 次

第Ⅰ章 発掘調査に至る経緯	(面高)	1
第Ⅱ章 高城町の歴史的環境	(長津)	3
第Ⅲ章 城ヶ尾遺跡A地区の調査	(長津)	9
第1節 調査区の設定と概要		9
第2節 包含層の状態		9
第3節 縄文時代前期の遺構と遺物		14
第4節 縄文時代後・晩期の遺構と遺物		16
第5節 弥生時代後期の遺構と遺物		24
第6節 平安時代の遺構と遺物		28
第7節 小結		31
第Ⅳ章 城ヶ尾遺跡B地区の調査	(寺師)	48
第1節 調査区の設定と概要		48
第2節 包含層の状態		48
第3節 縄文時代の土器		51
第4節 弥生時代の遺構と遺物		53
第5節 その他の時代の遺構と遺物		71
第6節 小結		72
第Ⅴ章 まとめ	(長津)	81

## 挿 図 目 次

### A地区

第1図 牧ノ原古墳群分布図	4
第2図 高城町内遺跡分布図	5～6
第3図 牧ノ原1号墳出土円筒埴輪実測図	7
第4図 城ヶ尾遺跡周辺地形図	10
第5図 城ヶ尾遺跡A・B地区遺構分布図	11～12
第6図 A地区南北上層断面図	13
第7図 A地区出土縄文土器実測図(1)	14

第8図	A地区アカホヤ層上面遺構分布図	15
第9図	A地区御池ボラ層上面遺構分布図	17
第10図	A地区出土縄文土器実測図（Ⅱ）	18
第11図	A地区出土縄文土器実測図（Ⅲ）	19
第12図	A地区出土縄文土器実測図（IV）	20
第13図	A地区S A - 1 実測図	25
第14図	A地区重弧文器台出土状況図	26
第15図	弥生土器実測図	27
第16図	A地区S B - 1 実測図	29
第17図	A地区出土土師器実測図（I）	35
第18図	A地区出土土師器実測図（II）	36
第19図	A地区出土須恵器実測図（I）	37
第20図	A地区出土須恵器実測図（II）	38

## B地区

第1図	遺構分布図・土層図	49~50
第2図	縄文土器実測図	52
第3図	S A - 2 実測図	54
第4図	S A - 2 出土土器実測図	55
第5図	S A - 3 実測図	57
第6図	S A - 3 出土土器実測図	58
第7図	S A - 2・S A - 3 出土遺物分布図	59
第8図	土壤実測図（1）	60
第9図	土壤実測図（2）	61
第10図	弥生土器実測図（1）	63
第11図	弥生土器実測図（2）	64
第12図	出土石器実測図（1）	69
第13図	出土石器実測図（2）	70
第14図	その他の時代の遺物実測図	71

## 表 目 次

### A地区

第1表 繩文土器観察表.....	21~23
第2表 上師器・須恵器観察表.....	39~41
B地区	
第1表 弥生土器観察表.....	65

## 図 版 目 次

### A地区

図版1 城ヶ尾遺跡遠景・アカホヤ上面遠景.....	42
図版2 御池ボラ上面遠景・市来式土器出土状況.....	43
図版3 孔列土器出土状況・A地区1号住居.....	44
図版4 1号住居石窓丁出土状況・1号住居長頸壺出土状況.....	45
図版5 A地区弥生土器出土状況・A地区重弧文器台出土状況.....	46
図版6 A地区出土石器・A地区1号掘立柱建物.....	47

### B地区

図版1 B地区全景・ボラ層下調査・層序・土壤・調査風景.....	73
図版2 SA-2・SA-3.....	74
図版3 遺物出土状況.....	75
図版4 繩文時代の土器.....	76
図版5 弥生時代の土器(1).....	77
図版6 弥生時代の土器(2).....	78
図版7 弥生時代の土器(3).....	79
図版8 弥生時代の石器・その他の時代の遺物.....	80

## 第Ⅰ章 調査等に至る経緯

昭和61年8月県農政企画課長からレインボーオーク株式会社による高城町石山におけるミニゴルフ場造成工事に伴う「農地転用事前調査に係る意見について」文化課長あて照会があり、文化課では高城町教育委員会へ当事業地内に文化財の所在するか問い合わせをした。町教育委員会は当該地の分布調査を実施してなかったため、町では県に応援を求めて分布調査を実施することになり昭和61年8月27日文化課主任主事面高哲郎の担当で調査を実施した。ゴルフ予定地は、低丘陵および丘陵性の小台地で、2小台地上で遺物散布が確認された。計画では台地（A地区）がクラブハウス建設予定地、一台地（B地区）が5・6ホールとなっていた。そこで当事業については、文化財保護法第57条の2の規定により、工事着手60日前までに埋蔵文化財発掘届が必要であること、また、クラブハウス建設予定地については工事着手前に発掘調査を実施する必要があること第5・6ホール部分については盛土ないし削平を伴わない工法を用いれば発掘調査は必要ない旨指導し、なるべく遺跡に影響を与えない工法等を取るよう依頼した。遺跡の名称については、字名よりA地区を城ヶ尾遺跡、B地区を山路遺跡と呼称することとした。町教育委員会では、遺跡の性格を把握するため、9月18、19日文化課主任北郷泰道の担当で試掘調査を実施した。その結果、城ヶ尾遺跡では遺構として中世と考えられる柱穴が検出され、遺物は弥生土器等が出土し、また、山路遺跡では弥生～古墳時代と推定される土器が出土したので、城ヶ尾遺跡は弥生時代及び中世を中心とした集落跡、山路遺跡は弥生～古墳時代の集落跡であると推定された。

昭和61年9月10日付けでレインボーオーク株式会社から埋蔵文化財発掘届が提出されたが、工事設計図では第5・6ホールの部分については盛土工法となっており、また、町教育委員会と事業者との協議でも遺跡の取扱いについては、山路遺跡のうちクラブハウスの部分については発掘調査、城ヶ尾遺跡については現状保存することが了解されていた。遺跡の保存等については昭和61年9月27日付け第108-18-21号により県教育長より「クラブハウスに係る部分については工事着手前に発掘調査を実施すること、第5・6ホールに係る部分については文化財担当者立会いの上盛土工事を実施すること」と通知した。昭和61年11月10日付けで高城町教育長とレインボーオーク株式会社取締役岡田吉朗との間で「レインボースポーツランド造成工事における埋蔵文化財に関する協定書」が締結された。その内容は、「城ヶ尾遺跡に係る部分のうちクラブハウスの部分については、工事着手前に発掘調査を実施する。駐車場の部分については、文化財担当者立会いのうえ地下遺構等に影響を及ぼさないよう簡易舗装を行う。山路遺跡に係る第5・6ホール部分については、文化財担当者立会いのうえ、杉は伐採後伐根はせず盛土工法ないし現状綠地とする。発掘調査は、町教育委員会へ委託することとし、発掘調査は昭和62年4月16日までに終了し、調査報告書は昭和64年3月刊行、その経費は1,166,000円とする」であった。この協定書を受けて昭

和62年3月5日付けで発掘調査委託契約書が締結された。

発掘調査は、昭和63年3月16日から4月16日間での予定で文化課主任主事長津宗重の担当で着手したが、御池ボラ層下の黒色土の層で縄文時代前期の曾畠式土器が出土したので調査期間が4月24日まで延長された。しかしながら、調査最終日の24日、実測の応援に行った際、第5・6ホールの工事状況を確認に行ったところ、提出された工事図面とは異なる工事、つまりフェアウェイの部分は3mほど掘削する工事が施工されていた。早急にその旨文化課へ連絡し、この件については今後町教育委員会等と協議することとして、調査を中断した。掘削工事を施工するに至った事情聽取をする中でとりあえず調査は5月8日に終了し、また、遺跡の破壊部分については現状復帰は無理であるので遺物回収作業を実施するよう指導し、その作業は5月25日から29日までの間4日間面高哲郎の担当で実施した。遺跡を破壊したことについては、昭和62年9月17日付けでレインボー観光株式会社代表取締役園田吉朗から懲戒書が提出され、昭和62年11月18日付け委保第5号により文化庁次長から二度とこのようなことがないようにとの注意がなされた。

レインボー観光株式会社ではクラブハウスに隣接してカートハウスを建設することになり、昭和62年5月12日付けで埋蔵文化財発掘届が提出されたので、工事着手前に発掘調査を実施するよう指示し、6月1日から7月7日までの間、宮崎考古学会会員（現山田町教育委員会社会教育課主事）寺師雄二氏及び面高哲郎の担当で二次調査を実施した。

山路遺跡は、約1000m<sup>2</sup>ある丘陵性の台地に立地しており、弥生～古墳時代の土器片採集される場所で集落跡でもあると推定されていた。4月24日の段階では掘削されたのり面で御池ボラ層に豊穴住居跡らしい掘り込み等が確認されていた。5月下旬の遺物回収作業では、浅い所でもアカホヤ層下50～60cm掘削を受けており、遺構等は確認されなかったが、遺物は、縄文早期の貝殻文土器、前期の滑石を含む曾畠式土器、晩期の黒色磨研土器、古墳時代の須恵器壺（須恵第IV期）、上師器、平安時代の布痕土器、須恵器等が採集された。当遺跡は縄文早期から平安にかけて有望な集落跡であったと考えられる。特に遺跡周辺には都城盆地では数少ない前方後円墳を有する牧ノ原古墳群等が所在しており、当遺跡はこれらの古墳群を造営していく集落の一つと考えられることから、山路遺跡の大半が未調査のまま消滅したことは文化財保護上誠に残念なことである。二度とこうした事態が起こらないことを望む次第である。

## 第Ⅱ章 城ヶ尾遺跡周辺の歴史的環境

高城町は高崎県の南西部に位置し、県の北半部の九州山脈と南部の南那珂山地に挟まれた凹地部に位置する。城ヶ尾遺跡は都城盆地中・北部台地群に属し、西を大淀川、東を東岳川に挟まれたシラス台地中位（標高148m）に位置する。城ヶ尾遺跡の歴史的環境を知るために、町内の遺跡を時代順に概観する。

**旧石器時代** 旧石器時代の遺物・遺跡は確認されていないが、北隣りの野尻町新村・高山遺跡ではナイフ形石器・剝片が出上しているので、当地域でも発見される可能性がある。

**縄文時代** 縄文時代の遺跡としては八久保遺跡（大字有水八久保）が知られているだけであり御池ボラの下層から上器が出上している。今回の城ヶ尾遺跡発掘調査の結果、御池ボラの下層の黒色土から前期の曾畠式土器が出上しており、八久保遺跡も同時期と推定される。後・晩期の土器は今回の城ヶ尾遺跡の発掘調査によって出土しているが、遺構は確認されていない。

**弥生時代** 弥生時代の遺跡としては向原遺跡（大字大井手向原）だけが知られており、後期の長頭壺が出土している。今回の城ヶ尾遺跡の発掘調査によって重弧文の長頭壺とともに後期の日向型間仕切り住居3軒が検出され、当地域の集落の様相の一部を窺うことができる。

**古墳時代** 古墳時代の遺跡としては雁寺遺跡（大字有水雁寺入口）だけが知られており、今回の山路遺跡の調査によって6世紀末の須恵器が出土している。

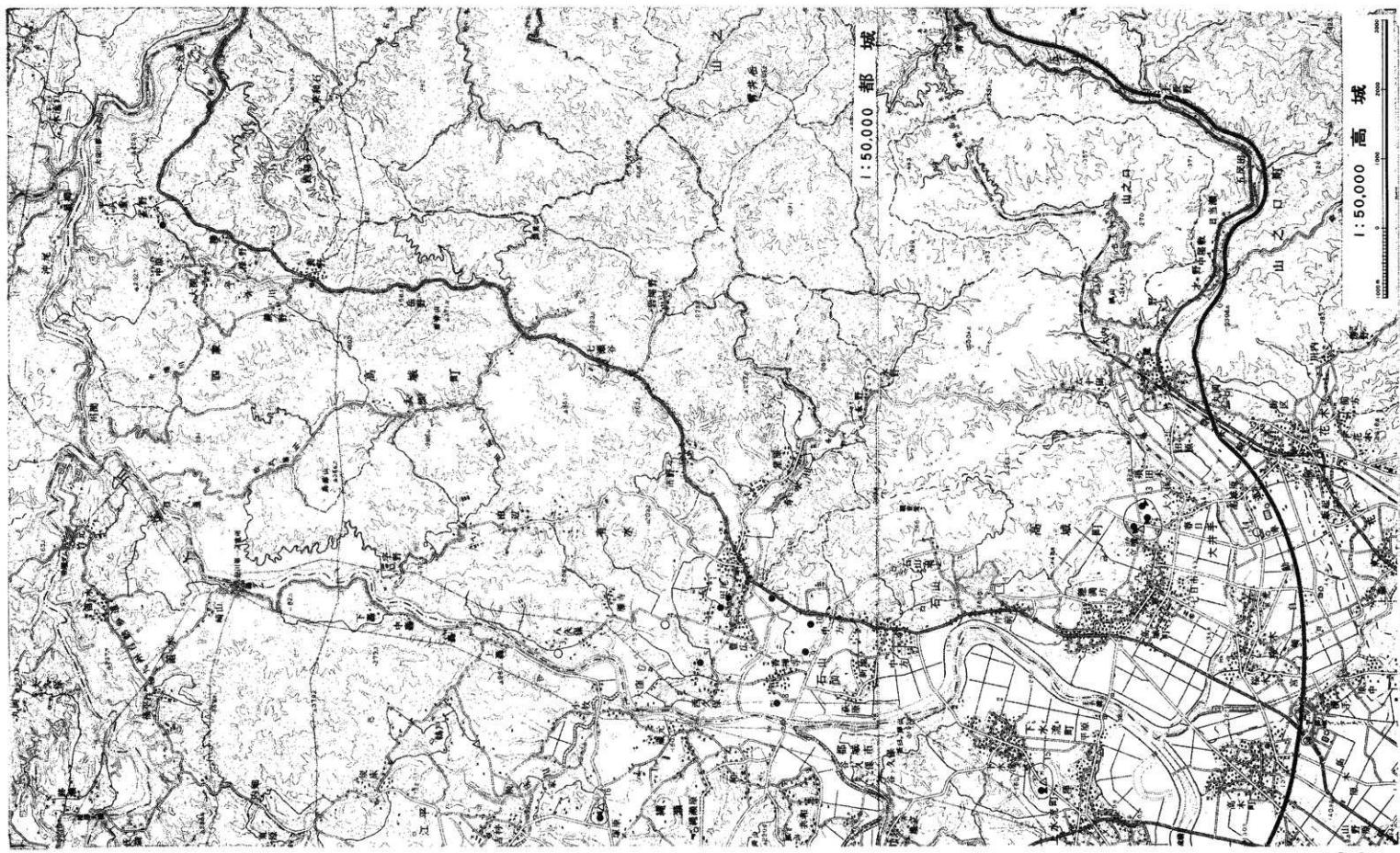
町内の中心的な古墳群である牧ノ原古墳群（大字大井手牧ノ原）は大淀川右岸のシラス台地上位（標高170m・比高30m）に位置し、前方後円墳3基・円墳10基・地下式横穴墓1基・箱式石棺4基で構成されている。1号墳を中心とするAグループ（1～4号墳）と6号墳を中心とするBグループ（5～11号墳）に分かれ、Bグループは地下式横穴墓・箱式石棺を含んでおり、△グループと対照的なあり方を示す。1号墳は全長50.4m、後円部径24m、同高さ5.8m、前方部長さ25m、同幅33.5m、同高さ3.7mの前方後円墳であり、西側には周溝を有する。3号墳は全長38.6m、後円部径28m、同高さ4.4m、前方部長さ10.5m、同幅9.5m、同高さ2mの帆立貝式前方後円墳である。6号墳は全長45.4m、後円部径26m、同高さ2.9m、前方部長さ22.5m、同幅27.5m、同高さ3.4mの前方後円墳であり、前方部は墓地でかなり改変されている。2号墳は径31.2m、高さ4.2mの円墳である。11号墳は径40m、高さ5mの円墳である。その他の円墳は10m～15mの小円墳である。当古墳群の首長墓の系譜は、墳丘の形態から1号墳→6号墳→3号墳→2号墳と推定され、6世紀になって造営されたと考えられる。円形の透穴で縱方向のハケメを有する円筒埴輪片が1号墳から表採されている（第3図）。13号墳は主体部は未調査であるが、周辺から箱式石棺1基・地下式横穴墓1基・土塙墓1基が調査されており、種々の墓制が採用されている点で注目される。土塙墓は長さ3.7m、幅1.5mの規模で幅広のタイプであるので、古墳時代



第1図 牧ノ原古墳群分布図 (縮尺1/2500)

● 円墳  
▲ 築式石棺  
■ 地下式横穴墓

第2図 高城町内地盤分布図(縮尺1:50,000)



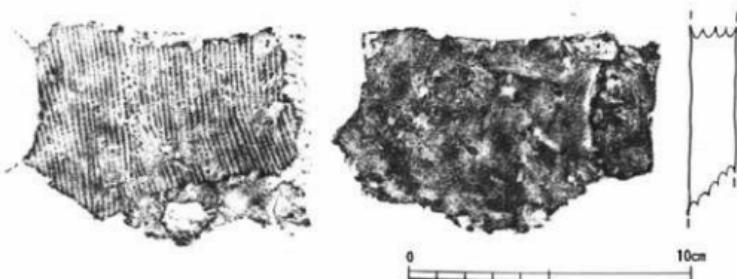
のものであり、鉄鎌1が出土している。当古墳群は1号墳の6世紀前半を初原として6世紀後半まで造営されている。当地域の首長墓の系譜は都城盆地を経済基盤として、当古墳群と塚原古墳群（高崎町・前方後円墳1基・円墳19基・方墳1基・地下式横穴墓6基）と志和池古墳群（都城市・前方後円墳1基・円墳11基・地下式横穴墓6基）の3古墳群の首長権の交代というような動的な在り方で把握する必要がある。

棺式石棺は昭和42年10号墳の南方約10mと30mの地点で2基、43年に13号墳から1基<sup>7</sup>、9号墳の南25mの地点で1基<sup>8</sup>が調査された。それぞれを調査した順に1号、2号、3号、4号と仮称する。2号石棺の内法は長さ182cm、幅27~41cm、深さ30cmで、人骨1体・鉄劍1・鉄鎌3・堅櫛1が出土した。4号石棺は長さ119+αcm、幅46cm、深さ33cmで、刀1・劍1・鉄鎌1が出土した。2・4号石棺とも蓋石に端を重ね、底に板石を敷いている。

地下式横穴墓は牧ノ原1基、雀ヶ野1基<sup>9</sup>、香禪寺1基<sup>10</sup>が調査されている。牧ノ原1号地下式横穴墓は平入り楕円形プランで、劍1・鉄鎌1が出土した。雀ヶ野1号地下式横穴墓は妻入り長方形プランで、劍1・刀子1・鉄斧1・鉄鎌12が出土した。香禪寺1号地下式横穴墓は片袖方形プランで、劍1・鉄鎌1が出土した。

地下式板石積石室墓は香禪寺遺跡で1基調査されている。規模は175cm、幅120cmで、劍1・鉄鎌5が出土した。地下式板石積石室墓は県内では川内川上流のえびの市と大淀川上流の香禪寺のみであり、注目される。香禪寺遺跡では地下式板石積石室墓と地下式横穴墓が共存しており、えびの市の灰塚遺跡・藏跡に例があるのみである。

以上のように、町内においては遺跡詳細分布調査が行われていないために各時代の遺跡の動態をほとんど把握できないが、今回の発掘調査によって各時代の様相の一部が窺えられるようになり、特に弥生時代後期の集落の様相が窺い知れるようになった。



第3図 牧ノ原1号墳出土円筒埴輪

註

- (1) 宮崎県「土地分類基本調査（野尻）」1981
- (2) 日高孝治「新村遺跡・高山遺跡」『野尻町文化財調査報告書』第1集 1986
- (3) 宮崎県教育委員会「宮崎県遺跡台帳」 1976
- (4) 註(3)と同じ
- (5) 註(3)と同じ
- (6) 石川恒太郎「高城町牧ノ原遺跡調査報告書」『宮崎県文化財調査報告書』第14集 1969
- (7) 栗原文蔵「高城町牧ノ原発見の石棺」『宮崎県文化財調査報告書』第12集 1967
- (8) 註(6)と同じ
- (9) 石川恒太郎・岩永哲夫「牧ノ原箱式石棺発掘調査」第20集 1978
- (10) 註(6)と同じ
- (11) 岩永哲夫「雀ヶ野地下式古墳発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第20集 1978
- (12) 石川恒太郎「香津寺遺跡」『宮崎県文化財調査報告書』第4集 1959
- (13) 註(12)と同じ

## 第Ⅲ章 城ヶ尾遺跡A地区の調査

### 第1節 調査区の設定と概要

城ヶ尾遺跡は行政区では高城町大字石山字城ヶ尾であり、宮崎市の南西約31kmに位置する。城ヶ尾遺跡は大淀川を西に臨んで、都城盆地に向って南に伸びる都城盆地中・北台地群の標高160mに位置する。

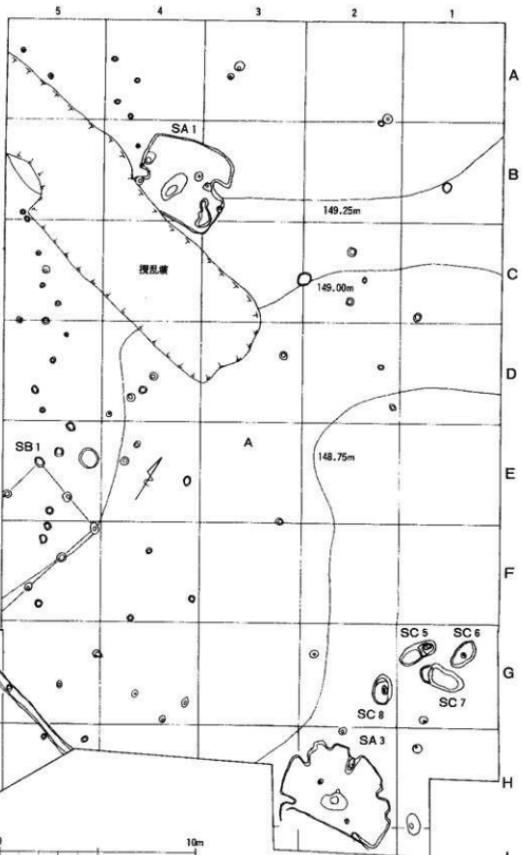
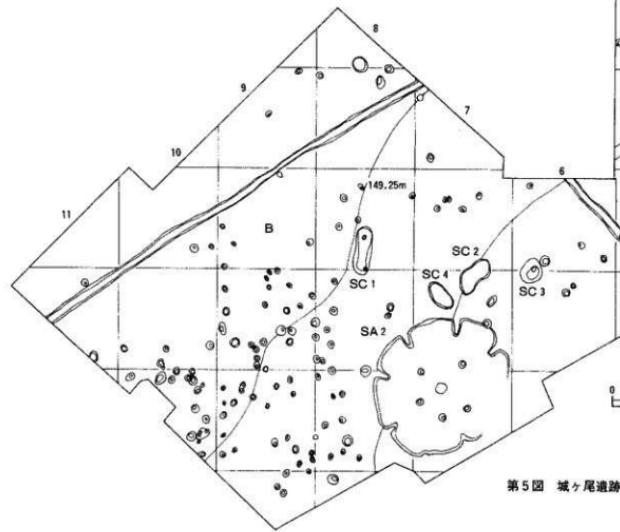
ゴルフ場のクラブハウスの建設に伴って昭和62年3月16日～5月8日まで962m<sup>2</sup>（御池ボラ上面780m<sup>2</sup>・アカホヤ上面182m<sup>2</sup>）の発掘調査が高城町教育委員会によって行われた。その結果、縄文時代前期の曾畠式土器、後期の市来式土器、晚期の黒色磨研土器・孔列土器・刻目突帯文土器、打製石鎌・磨製石斧・打製石斧などが出土した。弥生時代後期前半の突出壁2個を有する方形プランを基調とする日向型間仕切り住居1軒が検出され、杏仁形の石庖丁と長頸壺が出土した。また遺構には伴わないが、重弧文を体部に施した器台が出土したのは注目される。平安時代の土師器・布痕土器・須恵器などが出土し、掘立柱建物（2間×2+α間）1棟が検出された。御池ボラの下層で縄文前期の曾畠式土器が出土したこととは、今後の発掘調査は御池ボラの下層まで行う必要性の端緒となった。

### 第2節 包含層の状態

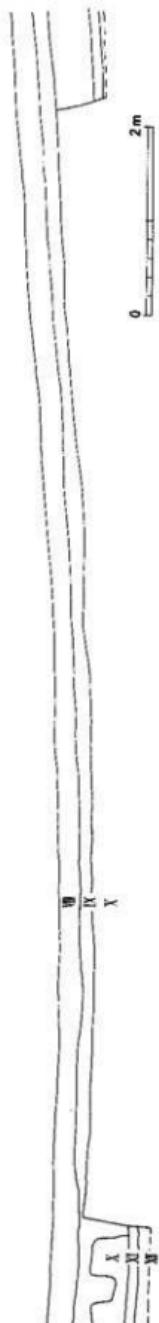
当遺跡では、御池ボラが100cm～150cmと厚く堆積しており、アカホヤ層も良く残存していた。当遺跡の基本層序は、第I層が黒褐色土層（Hue 7.5YR 3/1・耕土・ボラを多量に含む）、第II層が黒色土層（7.5YR 7/1・ボラを含まず）、第III層が黒色土層（7.5YR 2/1・ボラを少量含む）、第IV層が黒褐色土層（7.5YR 2/2・ボラを多量に含む）、第V層が黄褐色土層（御池ボラ・砂質）、第VI層が黒色土層（N 1.5・粘質）、第VII層が暗褐色土層（10YR 3/3・アカホヤ粒子を含む）、第VIII層が明黄橙色土層（10YR 6/8・アカホヤ）、第IX層が黒色土（10YR 2/1・硬質）、第X層が黒色土（7.5YR 1.7/1）である。第II～IV層から縄文後・晚期土器、弥生土器、土師器、須恵器などが出土し、第VI層から縄文前期の曾畠式土器が出土した。掘立柱建物は第IV層上面で、弥生時代の堅穴住居は第V層で検出された。



第4図 城ヶ尾遺跡周辺地形図（縮尺1/5000）



第5図 城ヶ尾道路A-B地区地質分布図 (縮尺1/200)



- 13 -

第Ⅰ層	耕土	(Hue 7. 5 YR 3 / 1)	
第Ⅱ層	黒色土層	(Hue 7. 5 YR 7 / 1)	ボラを含まない
第Ⅲ層	黒色土層	(Hue 7. 5 YR 2 / 1)	ボラを少額含む
第Ⅳ層	黒褐色土層	(Hue 7. 5 YR 2 / 2)	ボラを多量に含む
第V層	黒色土層	(Hue 7. 5 YR 2 / 2)	ボラを多量に含む
第VI層	暗褐色土層	(Hue 7. 5 YR 3 / 3)	ボラを多量に含む
第VII層	黒褐色土層	(N 1. 5)	黒褐色ボラ層
第VIII層	黒色土層	(10 YR 4 / 4)	粘質 赤褐色ボラ小片を若干含む
第IX層	黒色土層	(Hue 10 YR 6 / 8)	下部にいくほどアカホヤ粒を含む
第X層	黒色土層	(Hue 10 YR 2 / 1)	アカホヤ層 灰を含み硬質 (小林方面の力シワバン)
第XI層	黒色土層	(Hue 7. 5 YR 1. 7 / 1)	黒色土、明褐色のボラ粒を含む

第6図 城ヶ尾道路A地区東西ベルト土層断面図

### 第3節 繩文時代前期の遺構と遺物

繩文時代前期の遺構はアカホヤ層上面で11個のピットが検出されたが、性格は明確ではなかった。前期の遺物として曾畠式土器が御池ボラとアカホヤ層の間の黒色土（粘質）から出土したが石器は出土しなかった。

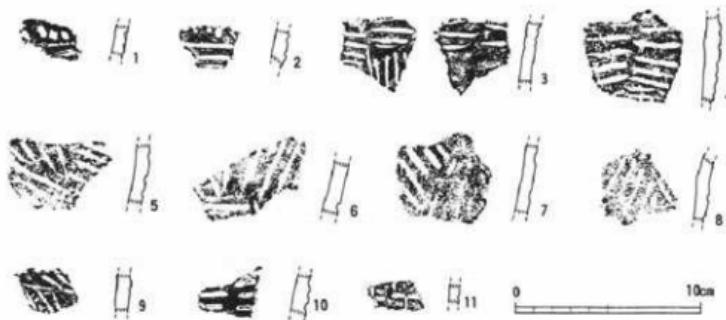
#### (1) ピット（第8図）

アカホヤ層上面で検出されたピットは長さ70cm、幅50cm、深さ20cmの規模が標準的であり、梢円形プランである。SH6とSH11は不定形プランを呈しており、SH11は長さ145cm、幅80cm深さ24cmと大形である。B-3・4、C-3のaグループとD-2・3、E-2・3のbグループに分布域は分かれる。遺物を伴うものではなく、性格は不明である。

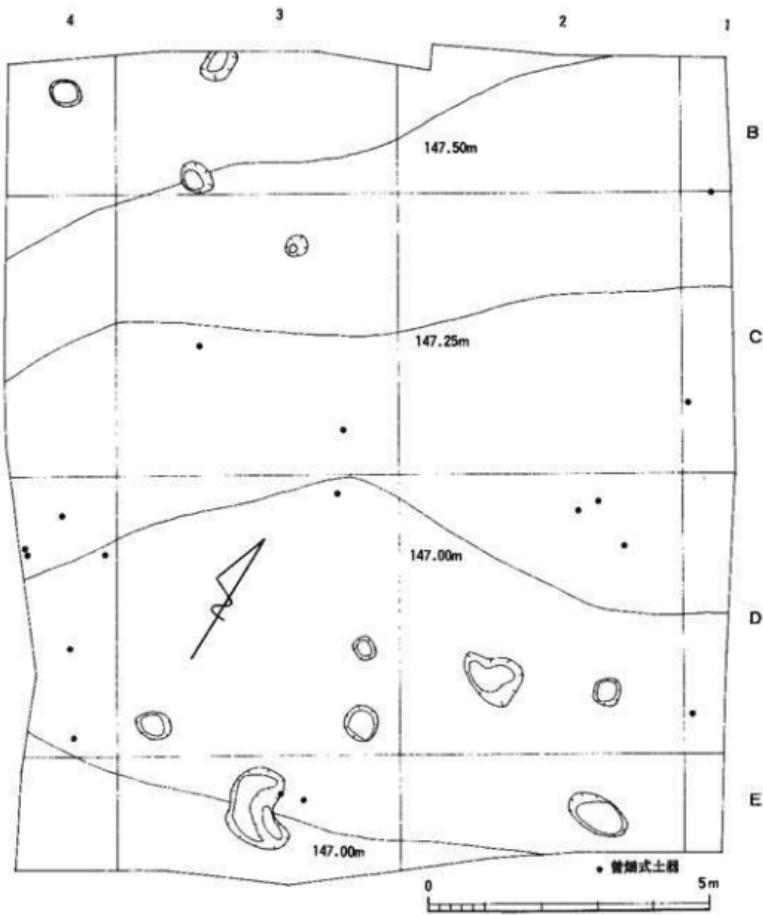
#### (2) 曾畠式土器（第7図）

アカホヤ上層の黒色土層（粘質）から出土した曾畠式土器は計8点であり、小片が多い。曾畠式土器の出土はD-1・2・4とE-3に分布が集中し、bグループのピット群に対応する。

出土した曾畠式土器は口縁部の文様帶が刺突文によって構成されるもの（第7図1・2）、口縁部内面にヘラ沈線を施すもの（第7図3）、横沈線文のもの（第7図4）、斜行沈線文を密に施した複合鋸歯文があるもの（第7図5～8）に分類される。



第7図 A地区出土繩文土器実測図 (I) (縮尺1/3)



第8図 A地区アカホヤ層上面造構分布図(縮尺1/100)

#### 第4節 繩文時代後・晚期の遺構と遺物

縄文時代後・晚期の遺構は御池ボラ上面では検出されなかった。土器としては市米式土器、磨消繩文土器、黒色磨研土器、孔列土器、刻目突帯文土器などがある。石器としては打製石鎌、打製石斧、磨製石斧が出土した。

##### (1) 土 器 (第10~12図)

御池ボラ上面より出土した土器は次のように分類される。

第Ⅰ類土器 口縁部が断面二角形で、貝殻腹縁の刺突を基本として凹線文・爪形の列点文などで構成された文様を施す。第Ⅰ類は口縁部に貝殻刺突文と凹線文を施すA類（第10図12~20）、口縁部の上下に貝殻刺突文を施すB類（第10図21~23）に分かれる。更にそれぞれ波状口縁と平坦口縁に分かれる。

第Ⅱ類土器 頸部でくびれ、口縁部へゆるやかに外反する。頸部付近に貝殻腹縁刺突文・凹線文を施す。第Ⅱ類は貝殻腹縁刺突文を有するA類（第10図24~31）、凹線文と貝殻腹縁刺突文の組み合わせのB類（第11図32）に分かれる。

第Ⅲ類土器 貝殻条痕を施す無文土器である（第11図36・37）。

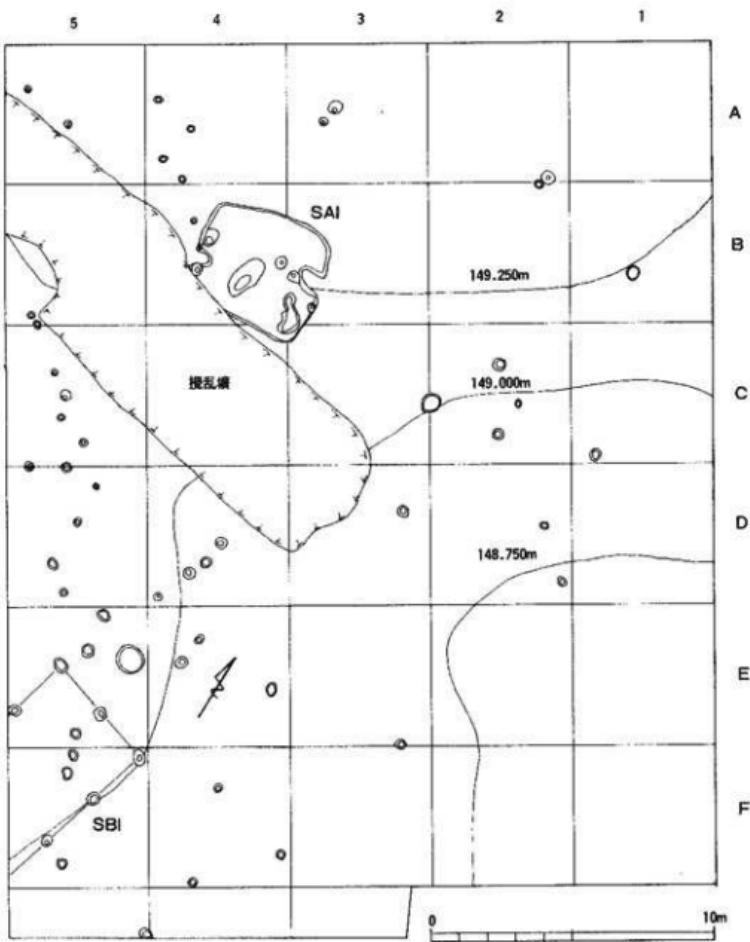
第Ⅳ類土器 組織痕のある土器である（第11図38）。

第Ⅴ類土器 平行沈線と渦巻き状の沈線で構成され、沈線間を繩文を施した部分と、磨り消してへラ磨した部分が交互にある磨消繩文土器である（第11図39）。

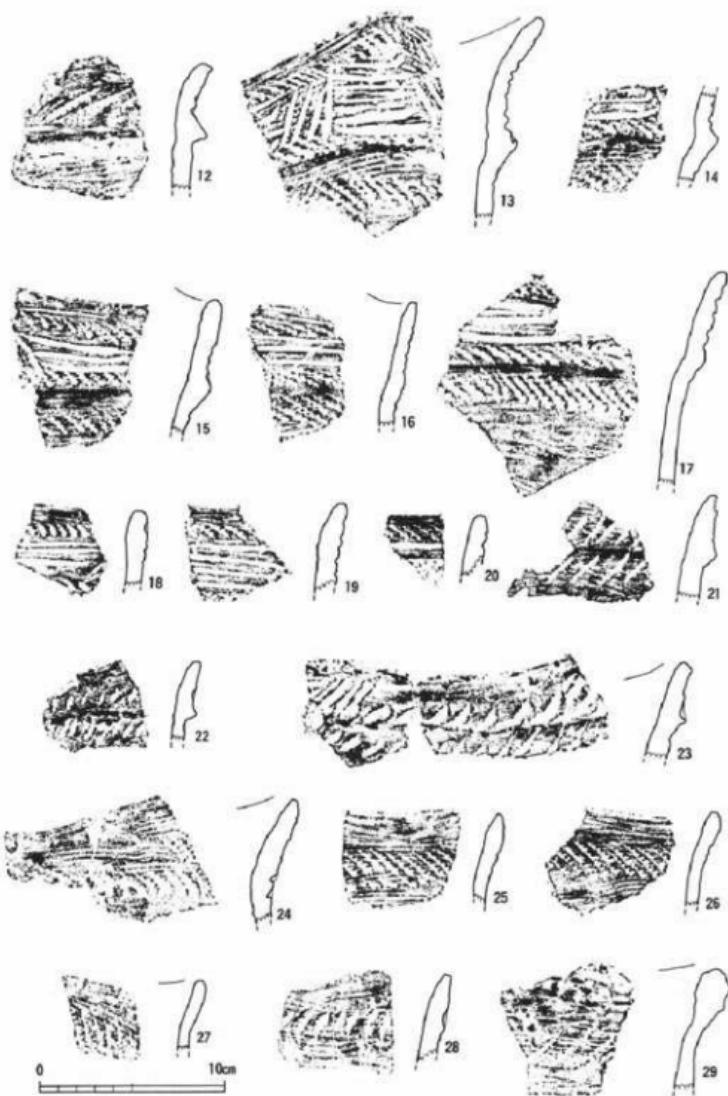
第VI類土器 口縁部の内外面に1条の沈線を施し、横方向の丁寧なへラ磨きを施した黒色磨研土器である（第11図44~50）。

第VII類土器 若干外反する口縁に末貫通の孔列を施した土器である（第12図54・62）。

第VIII類土器 若干外傾する口縁部の外面に一条の刻み目突帯を施した土器である（第12図57~60・63・64）。この中には63のように貫通した孔列を有する刻目突帯文土器もある。また57~60・63のように幅の狭いシャープな刻目突帯文土器と64のように幅広の刻目突帯土器がある。



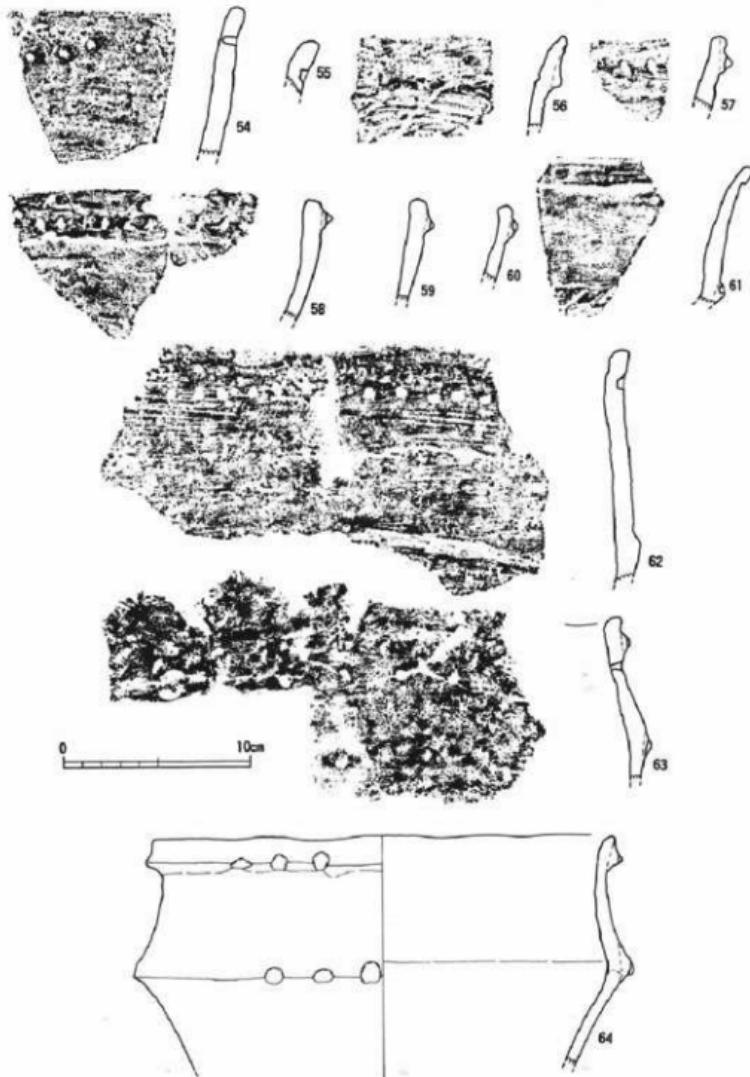
第9図 A地区御池ボラ上面遺構分布図 (縮尺1/200)



第10図 A地区出土縄文土器実測図（II）（縮尺1/3）



第11図 A地区出土縄文土器実測図（Ⅲ）（縮尺1/3）



第12図 A地区出土縄文土器実測図 (IV) (縮尺1/3)

## 編文土器観察表

箇所 番号	遺物 名	遺物 番号	グリッド 番号	層番	断面 部	外 文 面	内 文 面	外 形 面	内 形 面	要 素 面	地 質	外 色 面	内 色 面	地 質	土	備 考	分類
第7箇所	1	D-2	深林	洞	刺文 凹痕	ナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	滑	明赤褐色 (5YR 5/6)	暗赤褐色 (7.5YR 4/4)	滑	6.6	1~2mm大粒の砂を含む	
"	2	C-1	深林	洞	刺文 凹痕	ナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	滑	明赤褐色 (5YR 5/6)	暗赤褐色 (7.5YR 4/3)	滑	6.6	1~2mm大粒の砂を含む	
"	3	D-4	深林	洞	刺文 凹痕	ナデ	ナデ	良好	ナデ	良好	滑	明赤褐色 (7.5YR 5/6)	暗赤褐色 (2.5Y 8/3)	滑	6.6	1~2mm大粒の砂を含む	
"	4	D-1	深林	洞	凹痕	ナデ	ナデ	良化青い 青緑	ナデ	良化青い 青緑	滑	明赤褐色 (2.5Y 7/3)	暗赤褐色 (2.5Y 7/3)	滑	6.6	1~2mm大粒の砂を含む	
"	5	C-3	深林	洞	凹痕	ナデ	ナデ	青緑	ナデ	青緑	滑	明赤褐色 (10YR 7/4)	暗赤褐色 (2.5Y 8/4)	滑	6.6	1~2mm大粒の砂を含む	
"	6	D-4	深林	洞	凹痕	ナデ	ナデ	青緑	ナデ	青緑	滑	明赤褐色 (7.5YR 5/6)	暗赤褐色 (10YR 5/6)	滑	6.6	1~2mm大粒の砂を含む	
"	7	E-3	深林	洞	凹痕	ナデ	ナデ	青緑	ナデ	青緑	滑	明赤褐色 (10YR 5/6)	暗赤褐色 (10YR 5/6)	滑	6.6	1~2mm大粒の砂を含む	
"	8	C-3	深林	洞	凹痕	ナデ	ナデ	青緑	ナデ	青緑	滑	明赤褐色 (10YR 5/6)	暗赤褐色 (10YR 5/6)	滑	6.6	1~2mm大粒の砂を含む	
"	9	D-2	深林	洞	凹痕	ナデ	ナデ	青緑	ナデ	青緑	滑	明赤褐色 (10YR 5/6)	暗赤褐色 (10YR 5/6)	滑	6.6	1~2mm大粒の砂を含む	
"	10	E-3	深林	洞	凹痕	ナデ	ナデ	青緑	ナデ	青緑	滑	明赤褐色 (10YR 5/6)	暗赤褐色 (10YR 5/6)	滑	6.6	1~2mm大粒の砂を含む	
"	11	D-4	深林	洞	凹痕	ナデ	ナデ	青緑	ナデ	青緑	滑	明赤褐色 (7.5YR 7/3)	暗赤褐色 (7.5YR 7/3)	滑	6.6	1~2mm大粒の砂を含む	
第10箇所	12	D-2	深林	口縫部	刺文 凹痕	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	滑	明赤褐色 (7.5YR 6/6)	暗赤褐色 (7.5YR 6/6)	滑	5.4	1~3mmの砂を含む (白・うす赤・半透明)	1A
"	13	F-5	深林	口縫部	刺文 凹痕	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	滑	明赤褐色 (7.5YR 6/6)	暗赤褐色 (7.5YR 6/6)	滑	5.4	1~3mmの砂を含む (白・うす赤・光る)	1A
"	14	深林	口縫部	刺文 凹痕	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	滑	明赤褐色 (7.5YR 6/6)	暗赤褐色 (7.5YR 6/6)	滑	5.4	1~3mmの砂を含む (白・赤・黒・石英)	1A
"	15	F-1(?)	深林	口縫部	刺文 凹痕	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	滑	明赤褐色 (7.5YR 6/6)	暗赤褐色 (7.5YR 6/6)	滑	5.4	1~3mmの砂を含む (白・うす赤・光る)	1A
"	16	D-2	深林	山唇部	刺文 凹痕	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	滑	明赤褐色 (7.5YR 6/6)	暗赤褐色 (7.5YR 6/6)	滑	5.4	1~3mmの砂を含む (白・うす赤・光る)	1A
"	17	F-5	深林	口縫部	刺文 凹痕	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	滑	明赤褐色 (7.5YR 6/6)	暗赤褐色 (7.5YR 6/6)	滑	5.4	1~3mmの砂を含む (白・赤・黒・光る)	1A
"	18	F-1	深林	口縫部	刺文 凹痕	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	滑	明赤褐色 (7.5YR 5/4)	暗赤褐色 (7.5YR 5/4)	滑	5.4	1~3mmの砂を含む (白・うす赤・光る)	1A
"	19	F-5	深林	山唇部	刺文 凹痕	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	滑	明赤褐色 (7.5YR 4/3)	暗赤褐色 (7.5YR 4/3)	滑	5.4	1~3mmの砂を含む (白・赤・黒・光る)	1A
"	20	F-5	深林	山唇部	刺文 凹痕	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	滑	明赤褐色 (7.5YR 4/2)	暗赤褐色 (7.5YR 4/2)	滑	5.4	1~3mmの砂を含む (白・赤・黒・光る)	1A

第10回	21	D-1	深林	口縁部	貝殻堆積物	横方向の貝殻堆積	良いヨコナデ	良好	優 (7.5YR 6/6)	明赤褐色 (7.5YR 6/6)	1mm六の砂粒を含む (白・黒・光る)	外海にスズカ付着
	22	C-2	深林	口縁部	貝殻堆積物	横方向の貝殻堆積	ヨコナデ	良好	優 (7.5YR 6/6)	灰黄褐色 (10YR 4/2)	1mm六の砂粒を含む (白・黒・光る)	内海にスズカ付着
第11回	23	D-3	深林	口縁部	貝殻堆積物	横方向の貝殻堆積	ヨコナデ	良好	優 (7.5YR 6/6)	優 (7.5YR 6/6)	1~3mmの砂粒を含む (白・黒・光る)	波状山脈
	24	E-1・2	深林	口縁部	貝殻堆積物	横方向の貝殻堆積	ヨコナデ	良好	優 (7.5YR 6/6)	明褐色 (7.5YR 5/4)	1mm六の砂粒を含む (白・黒・光る)	波状山脈
第12回	25	D-3	深林	口縁部	貝殻堆積物	横方向の貝殻堆積	ヨコナデ	良好	優 (7.5YR 6/6)	優 (7.5YR 6/6)	1~2mmの砂粒を含む (白・黒・光る)	波状山脈
	26	D-2	深林	口縁部	貝殻堆積物	横方向の貝殻堆積	ヨコナデ	良好	優 (7.5YR 5/4)	優 (7.5YR 6/6)	1~2mmの砂粒を含む (白・黒・光る)	波状山脈
第13回	27	E-3	深林	口縁部	貝殻堆積物	横方向の貝殻堆積	ヨコナデ	良好	優 (7.5YR 6/6)	優 (7.5YR 6/6)	1mm六の砂粒を含む (白・黒・光る)	波状山脈
	28	D-2	深林	口縁部	貝殻堆積物	横方向の貝殻堆積	ヨコナデ	良好	優 (7.5YR 6/6)	優 (7.5YR 6/6)	1mm六の砂粒を含む (白・黒・光る)	波状山脈
第14回	29	D-3	深林	口縁部	貝殻堆積物	横方向の貝殻堆積	ヨコナデ	良好	優 (7.5YR 5/4)	優 (7.5YR 6/6)	1mm六の砂粒を含む (白・黒・光る)	波状山脈
	30	E-1	深林	口縁部	貝殻堆積物	横方向の貝殻堆積	ヨコナデ	良好	優 (7.5YR 6/6)	優 (7.5YR 6/6)	1mm六の砂粒を含む (白・黒・光る)	波状山脈
第15回	31	D-3	深林	口縁部	貝殻堆積物	横方向の貝殻堆積	ヨコナデ	良好	優 (7.5YR 6/6)	優 (7.5YR 6/6)	1mm六の砂粒を含む (白・黒・光る)	波状山脈
	32	D-2	深林	口縁部	貝殻堆積物	横方向の貝殻堆積	ヨコナデ	良好	優 (7.5YR 6/6)	優 (7.5YR 6/6)	1mm六の砂粒を含む (白・黒・光る)	波状山脈
第16回	33	D-2	深林	口縁部	貝殻堆積物	横方向の貝殻堆積	ヨコナデ	良好	優 (10YR 6/4)	灰 (10YR 5/3)	1~2mm六の砂粒を含む (白・黒・光る)	外海にスズカ付着
	34	D-2	深林	口縁部	貝殻堆積物	横方向の貝殻堆積	ヨコナデ	良好	優 (5YR 6/6)	灰 (5YR 5/6)	1mm六の砂粒を含む (白・黒・光る)	外海にスズカ付着
第17回	35	E-3	深林	口縁部	貝殻堆積物	横方向の貝殻堆積	ヨコナデ	良好	優 (5YR 6/6)	灰 (5YR 5/6)	1mm六の砂粒を含む (白・黒・光る)	外海にスズカ付着
	36	C-2	深林	口縁部	貝殻堆積物	横方向の貝殻堆積	ヨコナデ	良好	優 (5YR 6/6)	灰 (5YR 5/6)	1~2mm六の砂粒を含む (白・黒・光る)	外海にスズカ付着
第18回	37	F-2	林	口縁部	貝殻堆積物	横方向の貝殻堆積	ヨコナデ	良好	灰 (5Y 8/1)	灰 (5Y 6/1)	1~2mm六の砂粒を含む (白・黒・光る)	外海にスズカ付着
	38	D-1	深林	口縁部	貝殻堆積物	横方向の貝殻堆積	ヨコナデ	良好	灰 (5Y 8/2)	灰 (5Y 6/1)	1~2mm六の砂粒を含む (白・黒・光る)	外海にスズカ付着
第19回	39	D-4	林	林	貝殻堆積物	横方向の貝殻堆積	ヨコナデ	良好	灰 (5Y 8/2)	灰 (5Y 6/1)	1~2mm六の砂粒を含む (白・黒・光る)	外海にスズカ付着
	40	F-5	深林	底	貝殻堆積物	横方向の貝殻堆積	ヨコナデ	良好	灰 (5Y 8/2)	灰 (5Y 6/1)	1~2mm六の砂粒を含む (白・黒・光る)	外海にスズカ付着
第20回	41	深林	底	部	貝殻堆積物	横方向の貝殻堆積	ヨコナデ	良好	灰 (5Y 8/2)	灰 (5Y 6/1)	1~2mm六の砂粒を含む (白・黒・光る)	外海にスズカ付着
	42	E-1	深林	底	部	貝殻堆積物	ヨコナデ	良好	灰 (10YR 7/3)	灰 (10YR 7/3)	1~2mm六の砂粒を含む (白・黒・光る)	外海にスズカ付着

第11回	43	F-2	深林	森林	雨		ヨコナデ	ヨコナデ	普通	にがい・黄楓 黒(2.5Y 7/3)	1~2m大の砂粒多く含む 黒(2.5Y 5/1)
#	44	D-4	林	山腹面	一条の流れ		横向きのヘラ葉キ	横向きのヘラ葉キ	日野	波高(2.5Y 8/3)	1~2m大の砂粒多く含む (白・茶)
#	45	E-1	浅林	口頭部	一条の流れ		横向きのヘラ葉キ	横向きのヘラ葉キ	良好	波高(2.5Y 8/3) 黒(2.5Y 7/1)	1~2m大の砂粒多く含む (白・茶)
#	46	E-1	浅林	口頭部	一条の流れ		横向きのヘラ葉キ	横向きのヘラ葉キ	良好	波高(2.5Y 8/3) 黒(2.5Y 7/1)	1~2m大の砂粒多く含む (白・茶)
#	47	D-4	浅林	頭部	一条の流れ		横向きのヘラ葉キ	横向きのヘラ葉キ	良好	波高(2.5Y 8/3) 黒(2.5Y 7/1)	1~2m大の砂粒多く含む (白・茶)
#	48	D-5	浅林	頭部	一条の流れ		横向きのヘラ葉キ	横向きのヘラ葉キ	良好	波高(2.5Y 8/3) 黒(2.5Y 7/1)	1~2m大の砂粒多く含む (白・茶)
#	49	F-2	浅林	斜面	一条の流れ		横向きのヘラ葉キ	横向きのヘラ葉キ	良好	波高(2.5Y 8/3) 黒(2.5Y 7/1)	1~2m大の砂粒多く含む (白・茶)
#	50	F-1	林	斜面	一条の流れ		ヘラ葉キ	ヘラ葉キ	良好	波高(2.5Y 8/3) 黒(2.5Y 7/1)	1~2m大の砂粒多く含む (白・茶)
#	51	F-4	浅林	口頭部	一条の流れ		横向きのヘラ葉キ	横向きのヘラ葉キ	良好	波高(2.5Y 8/3) 黒(2.5Y 7/1)	1~2m大の砂粒多く含む (白・茶)
#	52	F-5	浅林	口頭部	一条の流れ		ヨコナデ	ヨコナデ	良好	波高(2.5Y 8/3) 黒(2.5Y 7/1)	1~2m大の砂粒多く含む (白・茶)
第12回	54	F-2	深林	口頭部	孔列(未貫通)		横向きのヘラ葉キ	横向きのヘラ葉キ	良好	波高(2.5Y 8/3) 黒(2.5Y 7/1)	1~2m大の砂粒多く含む (白・茶)
#	55	F-1	深林	口頭部	孔列(未貫通)		ヨコナデ	ヨコナデ	良好	波高(2.5Y 8/3) 黒(2.5Y 7/1)	1~2m大の砂粒多く含む (白・茶)
#	56	D-1	深林	口頭部	突堤		柔軟	柔軟	良好	波高(2.5Y 8/3) 黒(2.5Y 7/1)	1~2m大の砂粒多く含む (白・茶)
#	57	F-1	深林	口頭部	突堤		ナデ	ナデ	良好	波高(2.5Y 8/3) 黒(2.5Y 7/1)	1~2m大の砂粒多く含む (白・茶)
#	58	D-1	深林	口頭部	突堤		ナデ	ヨコナデ	良好	波高(2.5Y 8/3) 黒(2.5Y 7/1)	1~2m大の砂粒多く含む (白・茶)
#	59	E-2	深林	口頭部	突堤		ナデ	ヨコナデ	良好	波高(2.5Y 8/3) 黒(2.5Y 7/1)	1~2m大の砂粒多く含む (白・茶)
#	60	E-1	深林	口頭部	突堤		ナデ	ヨコナデ	良好	波高(2.5Y 8/3) 黒(2.5Y 7/1)	1~2m大の砂粒多く含む (白・茶)
#	61	E-1	深林	口頭部	突堤		ヨコナデ	ヨコナデ	良好	波高(2.5Y 8/3) 黒(2.5Y 7/1)	1~2m大の砂粒多く含む (白・茶)
#	62	F-1	深林	口頭部	孔列(未貫通)		横向きの条痕 ナデ	横向きの条痕 ナデ	良好	波高(2.5Y 8/3) 黒(2.5Y 7/1)	1~2m大の砂粒多く含む (白・茶)
#	63	D-2	深林	口頭部	孔列(未貫通)		スズサウナ 波高(未観察)	スズサウナ 波高(未観察)	良好	波高(2.5Y 8/3) 黒(2.5Y 7/1)	1~2m大の砂粒多く含む (白・茶)
#	64	E-1	深林	口頭部	孔列(未観察)		波高(未観察)	波高(未観察)	良好	波高(2.5Y 8/3) 黒(2.5Y 7/1)	1~2m大の砂粒多く含む (白・茶)

## 第5節 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代後期の堅穴住居 1軒が検出され、弥生後期後半の土器が出土している。

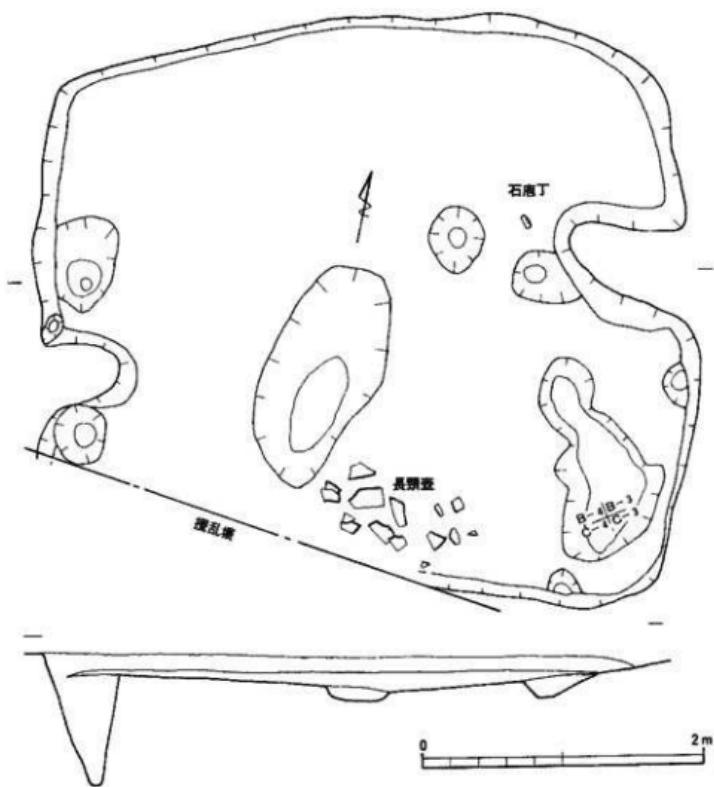
### (1) 堅穴住居（第13図）

1号住居は、長さ465cm、幅410cm、深さ12cmの規模で、短辺に各々1つの突出壁を有する日向型間仕切り住居である。主柱穴は、突出壁の際の柱で2本柱である。弥生土器は東側の部分で長頸壺の口頸部が出土しているが、他は甕などの小片である。また両刃の杏仁形石庖丁が東側の突出壁付近で出土した。

### (2) 弥生土器（第15図）

1～4は1号住居出土である。1は頸部と肩部の境に明瞭な2条沈線を巡らす長頸壺で、長頸部はほぼ直立気味に伸び、口縁部で若干外反する。長頸部の外面は縦方向と斜方向のヘラ磨きを施し、内面は丁寧なナデを施す。胎土は精選されており、焼成は良好で、色調は内外面とも橙色（2.5YR 6/6）である。2は大きく外反する口縁部を有する壺で、口唇部は凹気味である。外面はハケ目と横方向のヘラ磨きを、内面はヨコナデとハケ目を施す。3は内外面ともヘラ磨きを施した壺の口縁部である。4はくの字口縁の甕で、内面には横方向のハケ目を施す。

5～10は遺構には共なわない。5は短い口縁部が大きく外反する壺で、若干長脚気味である。口縁部は内外面ともナデを施し、頸部は指押えとシボリを行っている。胎土には2～3mmの砂粒を含み、焼成は良好で、外面の色調は橙色（7.5YR 7/6）である。6は口径17cmの壺の口縁部で、若干外反する口縁部である。口縁部の外面には縦方向のハケ目を、内面には指押えの後、ヨコナデを施す。胎土には1～2mm大の砂粒を含み、焼成は良好で外面の色調は浅黄橙色（10YR 8/4）である。7は若干上げ底気味の壺の底部である。8は重弧文を有する器台で、一段に円形透穴と4本の平行沈線と6～8本の重弧を上下に施している。口径33.0cm、底径29.6cm、

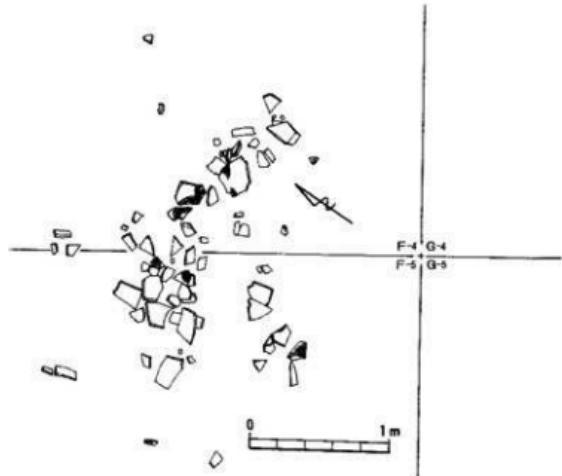


第13図 A地区SA I実測図 (縮尺1/40)

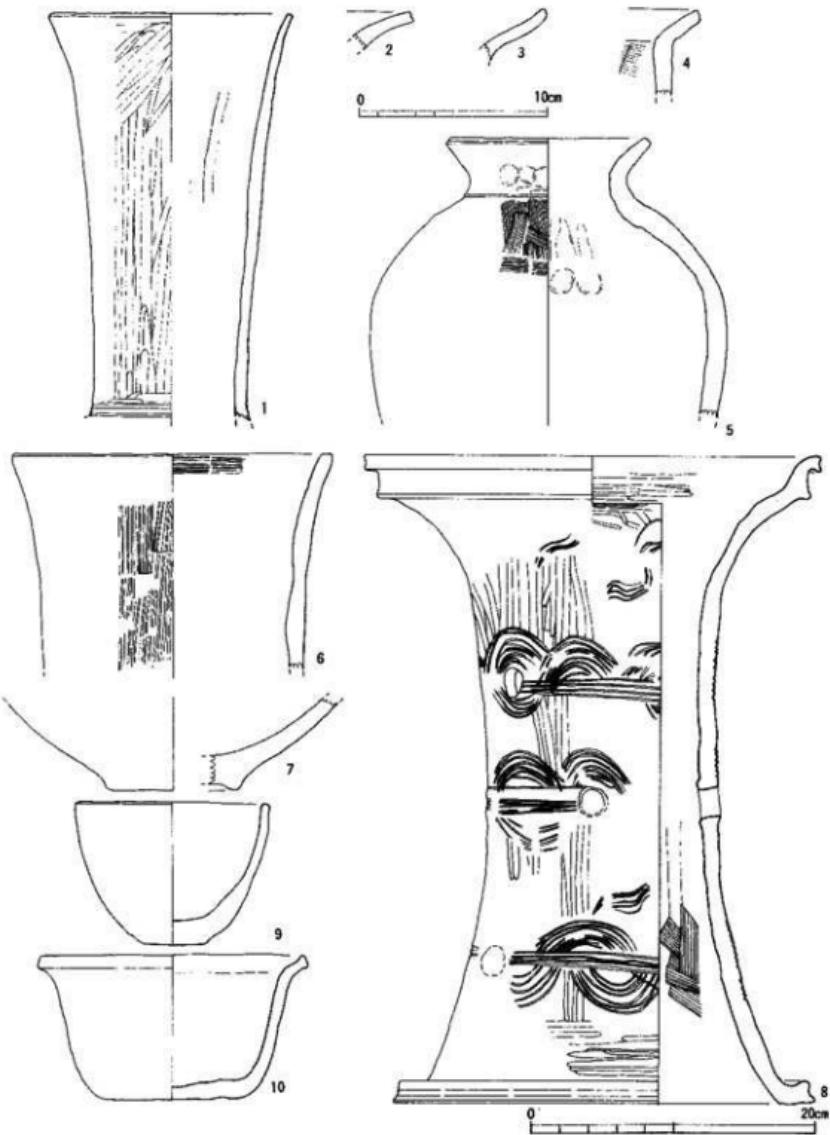
器高45.8cm。外面は板状のものによるナデの後、ヘラ磨きを施す。内面は上部は丁寧なナデを、下部にはハケ日を施す。胎土には1.5~2mm大の砂粒を若干含み、焼成は良好で、外面の色調は橙色(7.5YR 6/6)とにぶい黄橙色(10YR 6/4)である。9は口径10.4cm、器高7.6cmの鉢で、口縁部が直立気味に伸びる。外面は風化しておりヘラ磨きを施していると推定され、内面にはナデを施す。胎土には2~3mm大の砂粒を若干含み、焼成は良好で、外面の色調はにぶい黄橙色である。10は口径14.0cm、器高7.7cmの鉢で、口縁部が大きく外反する。内外面とも風化著しく調整は不明である。胎土には1~2mm大の砂粒を若干含み、焼成は良好で、外面の色調は黄橙色(10YR 4/8)である。

### (3) 石庵丁

1号住居出土の杏仁形の石庵丁は両端部を欠いているが、現存長10.3cm、幅4.4cmである。両刃で2穿孔を有し、斜方向の研磨を施している。



第14図 A地区重弧文器台出土状況図 (縮尺1/40)



第15図 弥生土器実測図 (縮尺1/3)

## 第6節 平安時代の遺構と遺物

平安時代の遺構は御池ボラ上層の第Ⅳ層（黒褐色土層）上面で掘立柱建物1棟が検出された。土師器・布痕土器・須恵器などの遺物は第Ⅱ・Ⅲ層で出土した。

### （1）掘立柱建物（第16図）

1号掘立柱建物は、E・F-5に位置し、2間×2+αの間で、桁行が210cm、梁行が225cm、主軸方向はN11°50' Eである。B地区の調査の結果、桁行は3間から伸びる柱穴は検出されていないので、1号掘立柱建物は2間×3間と推定される。

### （2）土師器

#### 壺（第17図）

当遺跡出土の土師器壺はすべてヘラ切り底であり、形態と法量により次のように分類される。

I-A-1類 1のように口径16.2cm、底径8.9cm、器高7.3cmと器高の高い大形の壺である（第17図1）。

I-A-2類 底部と体部の境が明瞭であり、2のように口径14.1cm、底径8.2cm、器高4.9cmとI-A-1類より一回り小さい（第17図2～4）。

I-A-3類 底部と体部の境をナデ消しており、底径は9～9.2cmである（第17図5・6）。

I-A-4類 丸底気味の底部を有し、底部と体部の境が明瞭でない。7が口径13.4cm、底径8.1cm、器高4.4cmで、8が口径12.0cm、底径5.0cm、器高4.1cmである（第17図7・8）。

I-B-1類 高台付壺で、9は口径12.7cm、底径8.6cm、器高4.3cmである（第17図9）。

#### 甕（第17・18図）

当遺跡出土の甕は口縁部の形態より次のように分かれる。

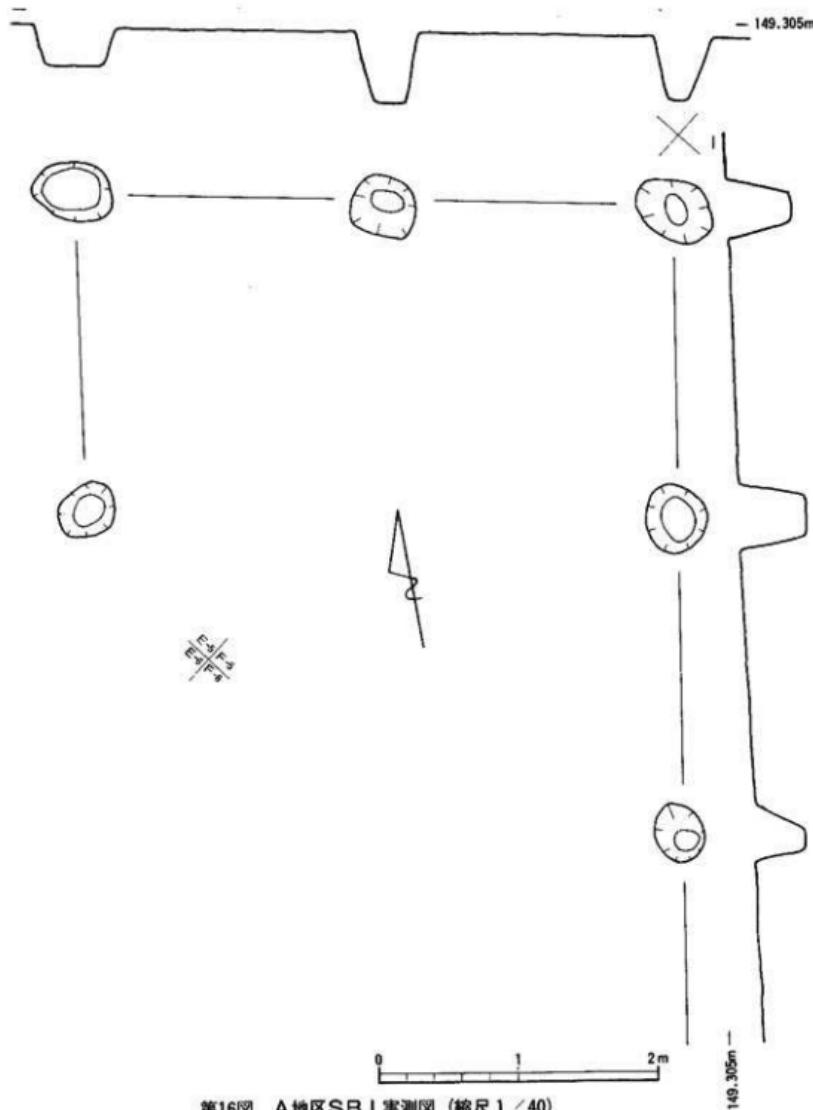
I類 やや直立気味に立ち上がる長い口縁を有する甕で、内外面とも調整はナデである（第17図10）。

II-A類 短く屈曲する口縁を有する甕で、胴部外面は縦方向の粗いハケ目を施す（第18図11～13）。

II-B類 短く屈曲する口縁を有する甕で、口縁部と胴部の境に強いヨコナデを施す。また胴部外面は縦方向のハケ目、内面は縦方向のヘラナデを施す（第18図14～17）。

#### 瓶（第18図18～20）

18・19は若干外反する口縁を有する長胴の瓶で、外面は縦方向の粗いハケ目、内面は下から上への板状工具によるナデを施す（第18図18・19）。20の把手が口縁と胴部の境に付くと推定される。（第18図20）



第16図 A地区S-1実測図 (縮尺1/40)

### 鉢（第18図21）

21は大きく外反する口縁を有する平底の鉢で、外面はヨコナデと横方向のハケ目を施し、内面は板状工具による横方向のナデを施す。色調は淡黄褐色であるが、焼成は非常に堅緻である。

### （3）布痕土器（第19図22～29）

布痕土器は、1号掘立柱建物の周囲のE-4・F-5から出土している。布痕土器は口唇部が鋭角的に削られた丸底の鉢形土器であり、内面に1cm角で錦糸と経糸が各12本の布目の痕跡を残している。口唇部の断面から鋭角的な口唇部を有するI類（22・26・27）、直角的な口唇部を有するII類（23～25）、内側にそぎおとした鋭角的な口唇部を有するIII類（28）に分かれる。色調は橙色であるが、焼成はやや軟のものと堅緻なものとがある。

### （4）須恵器（第19図30～46）

#### 壺（第19図31～35）

壺はすべてヘラ切り底であり、形態と法量により次のように分類される。

I-A-1類 体部と底部の境が明瞭であり、31は口径12.2cm、底径6.9cm、器高4.7cmである。内外面ともヨコナデを施す。

I-A-2類 体部と底部の境にヘラ削りを施しており、32は口径12.1cm、底径8.2cm、器高4.2cmである。33は底径8.0cmである。内外面ともヨコナデを施す。

I-B-1類 体部と底部の境は不明瞭であり、34は口径11.0cm、底径6.5cm、器高3.5cmで、35は口径11.2cm、底径6.0cm、器高4.0cmである。内外面ともヨコナデを施す。

#### 壺蓋（第19図30）

30は宝珠攝みを有し、かえりを持たない壺蓋である。口径14.0cm、器高2.6cmで天井部にヘラ削りを施している以外はヨコナデである。

#### 高台付壺（第19図36～41）

高台付壺はすべてヘラ切り底であり、形態と法量により次のように分類される。

I-A-1類 体部と底部の境にヘラ削りを施し、高台はほぼ直角に伸びる。36は口径12.2cm、底径8.1cm、器高4.0cmで、37は口径11.7cm、底径7.9cm、器高4.2cmである。38は底径8.2cmである。他の部位はすべてヨコナデである。

I-A-2類 体部と底部はヨコナデを施し、高台はほぼ直角に伸びる。39は口径12.4cm、底径8.1cm、器高4.2cmである。

I-B-1類 体部と底部の境はヨコナデを施し、高台は外方へ伸びる。40は口径12.0cm、底径7.5cm、器高5.0cmであり、すべてヨコナデを施す。42は底径7.0cmである。

I-B-2類 体部と底部の境はヨコナデを施し、高台はほぼ直角に伸びる。41は口径11.0cm、底径7.6cm、器高4.3cmである。

### 坏 (第19図43)

43はヘラ切りの底部で、体部がまっすぐ伸び、口縁部が若干外反する。口径15.0cm、底径12.5cm、器高4.1cmである。

### 甕 (第20図44~45)

44は甕の頭部で、外面は格子目叩きを、内面には指押えと同心円叩きを施す。45は44と一側体の甕の丸底の底部で、外面は格子目叩きを、内面には同心円叩きと平行叩きである。焼成はやや軟である。

### 高坏 (第20図46)

46は高坏の脚部で、ほぼ直立気味の脚部で、若干幅広がりに開く。内外面ともヨコナデを施す。

## 第7節 小 結

A地区は、縄文前期の曾畠式土器、縄文後期後半の市来式土器、縄文晩期の黒色磨研土器・刻目突蒂土器、弥生時代後期後半の上器、平安時代の須恵器・土師器などが出土し、弥生時代後期後葉の竪穴住居1軒と平安時代の掘立柱建物1棟が検出された。当遺跡は縄文前期から平安時代に営まれているが、最盛期は弥生時代後期と平安時代である。

御池ボラ下層の黒色土（粘質）から出土した縄文時代前期の曾畠式土器は、刺突文や直線文で構成された水ノ江和同氏分類のⅢ式に相当し、曾畠式土器の最後の段階である。ピットなどの遺構が検出されたが、竪穴住居などの生活遺構は検出されなかった。アカホヤ層の下層は安全管理の面で調査できなかった。

縄文時代後期後半の土器としては第Ⅰ類の市来式の深鉢形土器と第Ⅱ類の草野式の深鉢形土器が出土し、第Ⅴ類の鐘ヶ崎式土器も出土している。第ⅠA類の市来式土器は口縁部の上下の貝殻連続刺突文の間に凹線を施すと共に、頭部にも貝殻刺突文を施し、断面三角形の肥厚が薄くなり「くの字状」の断面をしているので、草野貝塚分類のVC1類に相当する。第ⅠB類は断面三角形の口縁部の肥厚が薄くなり、「くの字状」の断面を有し、口縁部下に貝殻腹縫刺突文を連続しており、草野貝塚分類のVC2類に相当する。第ⅡA類は頭部でくびれ、口縁部へやわらかく外反し、頭部の文様は凹線を伴わず、貝殻腹縫刺突文を施しており、草野貝塚分類のVI B類に相当する。第ⅡB類は頭部に貝殻刺突文と凹線を施しており、草野貝塚分類のVI A類に相当する。第Ⅴ類の鐘ヶ崎式土器は第Ⅰ類の市来式土器に伴うものである。遺構は検出されなかった。

縄文時代晩期前半の土器としては第VI類の黒色磨研の浅鉢形土器が出土しており、口縁部ほどより胴部最大径が大きく、頭部から横に胴部が張り出すタイプであり、平畠遺跡分類の晩期前半IV式に相当する。土器量は少なく、遺構も検出されなかった。

縄文時代後期後半の土器としては第VI類の口縁部と胴部の屈折部に刻目突帯を有する甕が出土しており、いわゆる夜臼式土器であるが、土器量は少ない。また第VII類の孔列土器が数点出土しており、62は口縁部端から孔までの距離は10~14mmで、口縁部に沿って焼成前に5~6mmの小孔

が6~12mm間隔で穿たれているが、未貫通である。それに対して63は体部に屈曲があり口縁部と屈曲部に刻目突帯を有する刻目突帯文土器であり、山崎純男氏分類の壺IV類・宇木汲田遺跡分類の壺III A類に相当し、口縁部の突帯の下に5mmの小孔が24~27mm間隔で穿たれているが、貫通しているものと貫通していないものがある。また口縁部に王冠のように山形を多数巡らしている点が非常に異っている。62の類例としては長行遺跡（福岡県北九州市）出土の孔列土器があるが、未貫通である点が異なる。一方、口縁部の形態を除くと63の類例としては吉母浜遺跡（山口県下関市）出土の孔列土器がある。県内では赤松遺跡・下水流遺跡（東郷町）、上別府遺跡（高鍋町）、紙園原遺跡・八幡上遺跡（新富町）、平畠遺跡（宮崎市）、二股町、中尾山遺跡（都城市）などで口縁部直下の突帯の下に孔列を巡らした土器が出土しているが、遺構には伴っていない。県内では前原北遺跡（宮崎市）のSC6出土のものが63の類例であるが、SC6のものは体部で屈曲していない点が異なる。

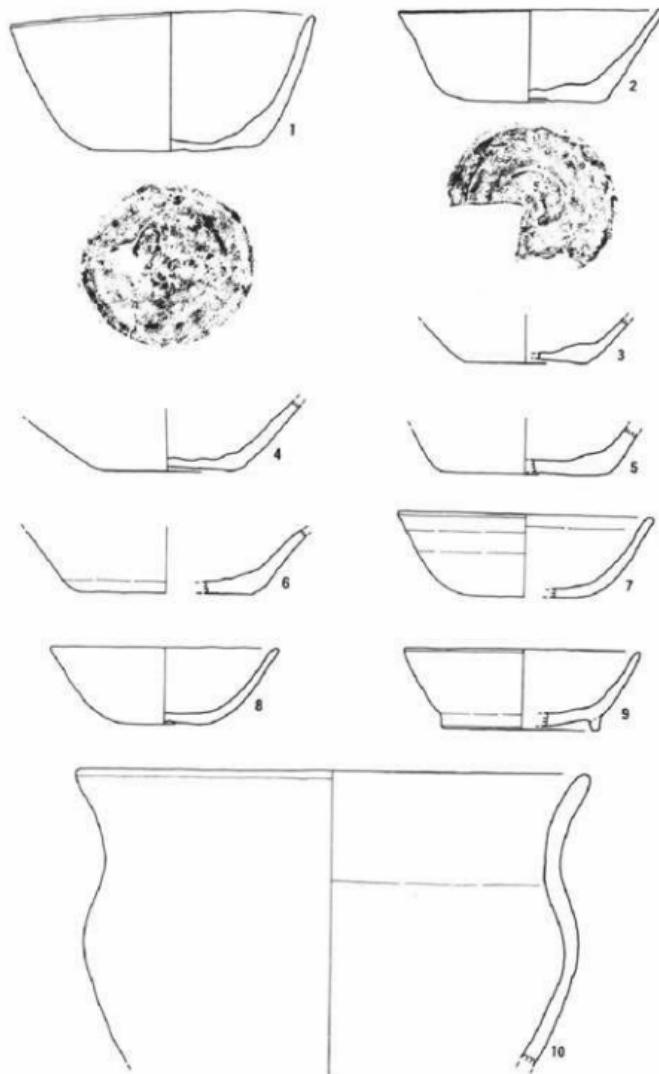
検出された弥生時代後期後葉の堅穴住居は、一辺4.5mの方形プランを基調とする日向型間仕切り住居で、突出壁を2有するが、ベッド状造構は有しない。日向型間仕切り住居は県内においては越シ遺跡（日向市）を北限として、一つ瀬川下流域・大淀川下流域・大淀川上流域・清武川下流域・川内川上流域に分布しているが、大淀川上流域の当町においては初めてである。1号住居から出土した長頭壺は重弧文土器の口頭部であり、くの字口縁の壺からも後期後葉に比定される。県内では73遺跡で131個の石庖丁が出土しているが、その48.6%をえぐり入り石庖丁が占めており、広義の宮崎平野の海岸部に分布している。それに対して当遺跡の1号住居から出土した石庖丁は杏仁形であり、注目される。また重弧文を施した器台としては短く直立した口縁部の外側に上向きの重弧文を施した一丁畳遺跡（熊本県城南町）のものが知られているが、体部に重弧文を三段に施した器台は全く類例はなく注目される。重弧文土器は県内では大淀川上流域と下流域、五ヶ瀬川上流域に分布している。

平安時代の掘立柱建物1棟（2間×3間）が検出され、ヘラ切り底の上師器坏、高台付きの須恵器碗、布痕土器が出土した。土師器の坏のI-A-2類は、形態・技法の点では平畠遺跡分類のI-A-1類に相当するが、法量の点で器高が3mmほど高い。また10世紀前半に比定されている小山尻東遺跡分類のI-Aa類より口径がひと回り大きくなり様相を示している。土師器の高台付き碗（坏I-B-1類）は法量から御笠川南条坊遺跡分類のI~2A類に相当し、9世紀後半~10世紀初頭に比定される。県内の歴史時代の須恵器の窯跡としては松ヶ迫窯跡（宮崎市）と苅田窯跡（延岡市）が調査されており、松ヶ迫窯跡は奈良時代前半に比定されている。10世紀中頃より下らない時期の短時間に操業された苅田窯跡の高台付き碗は口径7.7~8.5cm、器高6.4~7.5cmである。当遺跡出土の須恵器である宝珠攝み付きの蓋・高台付き碗は形態と技法の諸特徴から両窯跡に挾はれた9世紀後半の時期に比定される。布痕土器は森田勉氏分類のIIa類に相当する。これらの土器群は9世紀後半を中心する時期のものである。

註

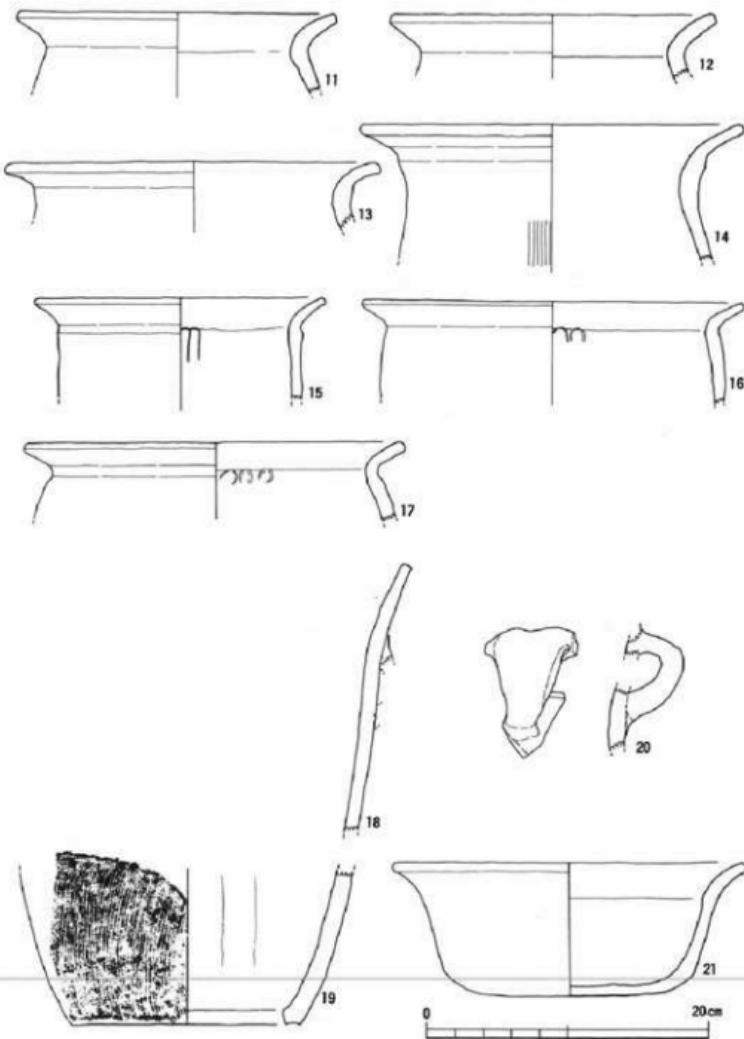
- (1) 水ノ江 和 同「西北九州における曾畠式土器の諸様相」「考古学と地域文化」同志社大学  
1987
- (2) 出 口 浩「草野貝塚」『鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書』鹿児島市教育委員会  
1988
- (3) 北 郷 泰 道「平畠遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第2集 宮崎県教育委員会  
1985
- (4) 武 木 武 一「北九州市長行遺跡の孔列土器」『記録』24冊 1987
- (5) 山 嶋 純 男「弥生文化成立期における土器の編年の研究」板付遺跡を中心としてみた  
福岡・早良平野の場合 『鏡山猛先生古稀記念古文化論集』1980
- (6) 横 山 浩 一「字木汲田遺跡1984年度発掘調査出土の土器について一突帯文土器を中心  
に」『九州文化史研究所紀要』第31号 九州大学文学部九州文化史研究  
施設 1986
- (7) 山 口 信 義「縄文時代の遺構と遺物」『長行遺跡』財団法人 北九州市教育文化事業團  
埋蔵文化財調査室 1983
- (8) 田 中 良 之「縄文系土器」『古母浜遺跡』下関市教育委員会 1985
- (9) 近 藤 協「赤松遺跡・下水流遺跡」『東郷町文化財調査報告』第1集 東郷町教育委  
員会 1987
- (10) 日 高 正晴他「上別府遺跡」『特殊農地保全整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』  
宮崎県教育委員会 1980
- (11) 沢 皇臣他「宮崎県兒湯郡新富町祇園原麦採の遺物」『宮崎考古』第3集 宮崎考古学  
会 1977
- (12) 長 津 宗 重「七又木地区遺跡」『昭和62年度農業基盤整備事業に伴う遺跡発掘調査概要  
報告書』宮崎県教育委員会 1988
- 近 藤 協「七又木地区遺跡」『昭和63年度農業基盤整備事業に伴う遺跡発掘調査概要  
報告書』宮崎県教育委員会 1989
- (13) 矢 部 喜多夫「都城市中尾山遺跡・馬渡遺跡発掘調査概要」『宮崎考古学会例会資料』宮  
崎考古学会 1987
- (14) 北 郷 泰 道「前原北遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第5集 宮崎県教育委  
員会 1985
- (15) 長 津 宗 重「日向型間仕切り住居研究序説」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第2  
集 宮崎県教育委員会 1985
- (16) 緒 方 博 文「越シ遺跡」『龜崎土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』  
日向市教育委員会 1986

- (17) 高千穂シンポジウム実行委員会『日・豊・肥・古文化研究会資料 3 一海と里と山の考古学』  
1983
- (18) 日高孝治「平畠遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第2集 宮崎県教育委員会1985
- (19) 長津宗重「小山尻東遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第3集 宮崎県教育委員会 1985
- (20) 前川威洋「筑紫都太宰府町所在御笠川南条坊遺跡(4)」『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第8集(下) 福岡県教育委員会 1978
- (21) 石川恒太郎『宮崎県の考古学』吉川弘文館 1968
- (22) 小田富士雄「苅田窯跡」『宮崎県文化財調査報告書』第24集 宮崎県教育委員会 1983
- (23) 福尾正彦「宮崎県内出土の須恵器—地下式横穴・高塚古墳出土例を中心として—」  
『古文化論叢』第6集 古文化研究会 1979
- (24) 森田勉「焼塩窯考」『大宰府古文化論叢』下巻 吉川弘文館 1983

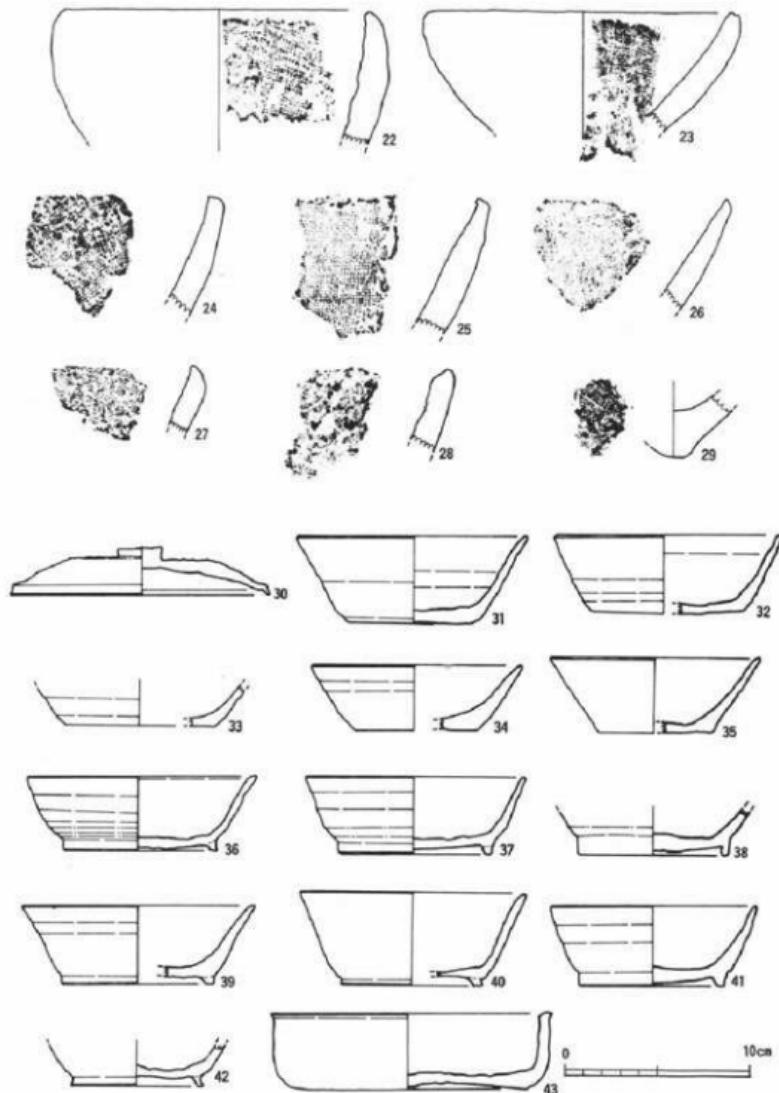


第17図 A地区出土土師器実測図 (I) (縮尺1/3)

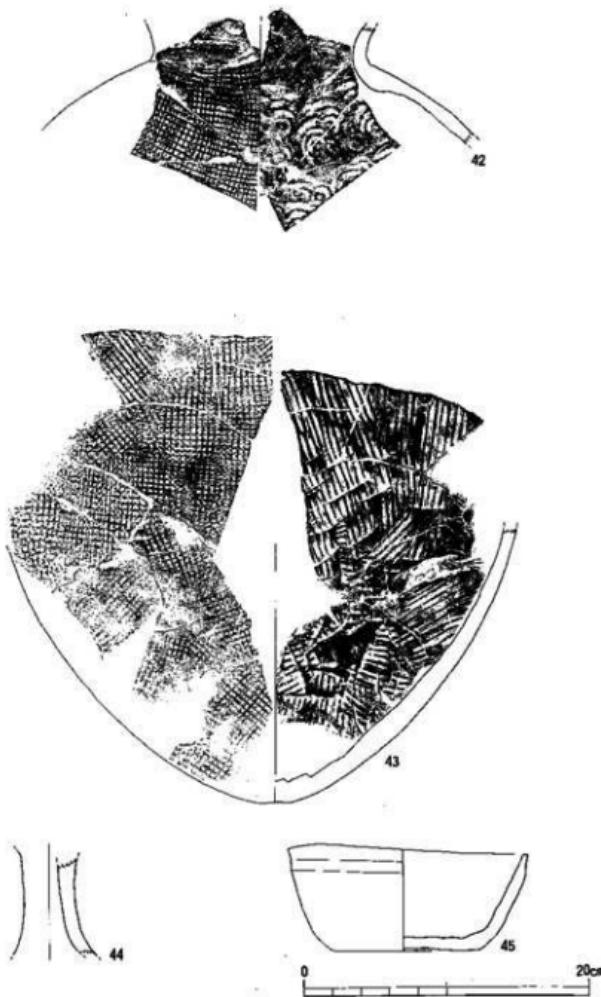
0 10cm



第18図 A地区出土土師器実測図(II) (縮尺1/4)



第19図 A地区出土須恵器実測図（I）（縮尺1／3）



第20図 A地区出土須恵器実測図(II) (縮尺1/4)

土師器・漆意器調査表

測面 番号	測定 番号	測定 場所	グリット 寸法	器種	形状	面 外 面	面 内 面	盤 面	底 面	地城	色			分類	
											内 面	外 面	内 面		
第17回	1	P-5	土師器 环	ヨコナデ	口縁部 底、腹	ヨコナデ	内4 ナデ	内4 ナデ	底	良好	浅薄地 (10YR 8/3)	浅薄地 (10YR 8/3)	浅薄地 (10YR 8/3)	1m <sup>2</sup> の砂粒若干含む (溝)	I-A-1
"	2	D-3	土師器 环	ヨコナデ	口縁部 底、腹	ヨコナデ	ヘラ切り 良好	ヘラ切り 良好	底	良好	浅薄地 (10YR 7/4)	浅薄地 (10YR 7/4)	浅薄地 (10YR 8/3)	1~2mmの砂粒若干含む (溝)	I-A-2
"	3	F-3	土師器 环	ヨコナデ	口縁部 底、腹	ヨコナデ	良好	ヨコナデ	底	良好	浅薄地 (10YR 8/4)	浅薄地 (2.5Y 7/4)	浅薄地 (2.5Y 7/4)	1m <sup>2</sup> の砂粒含む (系・灰・半透明)	I-A-2
"	4	E-2-3	土師器 环	ヨコナデ	口縁部 底、腹	ヨコナデ	良好	ヨコナデ	底	良好	浅薄地 (2.5Y 8/2)	浅薄地 (2.5Y 8/2)	浅薄地 (2.5Y 8/2)	0.5~1mmの砂粒若干含む (系・灰・白)	I-A-2
"	5	E-4	土師器 环	ヨコナデ	口縁部 底、腹	ヨコナデ	ヘラ切り 良好	ヘラ切り 良好	底	良好	浅薄地 (10YR 7/4)	浅薄地 (10YR 7/4)	浅薄地 (10YR 8/3)	1m <sup>2</sup> の砂粒若干含む (溝)	I-A-3
"	6	F-5	土師器 环	ヨコナデ	口縁部 底、腹	ヨコナデ	ヘラ切り 良好	ヘラ切り 良好	底	良好	浅薄地 (10YR 8/3)	浅薄地 (10YR 8/4)	浅薄地 (10YR 8/4)	0.5~1mmの砂粒若干含む (系・透明白)	I-A-3
"	7	E-3	土師器 环	ヨコナデ	口縁部 底、腹	ヨコナデ	良好	ヨコナデ	底	良好	浅薄地 (7.5YR 8/4)	浅薄地 (7.5YR 8/4)	浅薄地 (7.5YR 8/4)	0.5~1mmの砂粒含む (系・灰)	I-A-4
"	8	D-1	土師器 环	ヨコナデ	口縁部 底、腹	ヨコナデ	ヘラ切り 良好	ヘラ切り 良好	底	良好	浅薄地 (7.5YR 7/6)	浅薄地 (7.5YR 7/6)	浅薄地 (7.5YR 7/6)	1m <sup>2</sup> の砂粒若干含む (系)	I-A-4
"	9	F-5	土師器 环	ヨコナデ	口縁部 底、腹	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	底	良好	浅薄地 (7.5Y 8/2)	浅薄地 (7.5Y 8/2)	浅薄地 (7.5Y 8/2)	細粒粉を含む (系)	I-B-1
"	10	B-4	土師器 環	ヨコナデ	口縁部 底、腹	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	底	良好	浅薄地 (10YR 7/4)	浅薄地 (10YR 7/4)	浅薄地 (10YR 7/4)	0.5~1mmの砂粒を含む (系・灰・半透明)	I
第18回	11	D-4	土師器 環	ヨコナデ	口縁部 底、腹	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	底	良好	浅薄地 (2.5Y 8/3)	浅薄地 (2.5Y 8/3)	浅薄地 (2.5Y 8/3)	1~2mmの大砂粒多く含む (系)	IIA
"	12	D-3	土師器 環	ヨコナデ	口縁部 底、腹	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	底	良好	浅薄地 (2.5Y 8/4)	浅薄地 (2.5Y 8/4)	浅薄地 (2.5Y 8/4)	1~2mmの大砂粒を含む (系)	IIA
"	13	D-1-4	土師器 環	ヨコナデ	口縁部 底、腹	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	底	良好	浅薄地 (2.5Y 8/3)	浅薄地 (2.5Y 8/3)	浅薄地 (2.5Y 8/3)	0.5~1mmの大砂粒多く含む (系・灰・白)	IIA
"	14	E-2-3	土師器 環	ヨコナデ	口縁部 底、腹	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	底	良好	浅薄地 (10YR 8/3)	浅薄地 (10YR 8/3)	浅薄地 (10YR 8/3)	1~3mmの大砂粒多く含む (系・半)	IIB
"	15	D-2	土師器 環	ヨコナデ	口縁部 底、腹	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	底	良好	浅薄地 (10YR 8/4)	ヨコナデ (5Y 2/2)	浅薄地 (10YR 8/2)	1~2mmの大砂粒多く含む (系)	IIB
"	16	E-3	土師器 環	ヨコナデ	口縁部 底、腹	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	底	良好	浅薄地 (2.5Y 8/3)	浅薄地 (2.5Y 8/3)	浅薄地 (2.5Y 8/3)	1~3mmの大砂粒若干含む (系・半)	IIB
"	17	E-2	土師器 環	ヨコナデ	口縁部 底、腹	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	底	良好	浅薄地 (2.5Y 8/3)	浅薄地 (2.5Y 8/3)	浅薄地 (2.5Y 8/3)	1~2mmの大砂粒を含む (系)	IIB
"	18	E-3	土師器 環	ヨコナデ	口縁部 底、腹	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	底	良好	浅薄地 (10YR 8/4)	浅薄地 (10YR 8/4)	浅薄地 (10YR 8/4)	1~2mmの大砂粒を含む (系・灰・白)	IIB
"	19	F-3	土師器 環	ヨコナデ	口縁部 底、腹	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	底	良好	浅薄地 (10YR 8/3)	浅薄地 (10YR 8/4)	浅薄地 (10YR 8/4)	1~2mmの大砂粒を含む (系・灰・白)	IIB
"	20	D-3	土師器 環	ヨコナデ	口縁部 底、腹	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	底	良好	浅薄地 (10YR 8/3)	浅薄地 (10YR 8/4)	浅薄地 (10YR 8/4)	1~3mmの大砂粒を含む (系・灰・白)	IIB

第16回	21	E-2-4	七面器 鉢	口縁部 鉢土器 部	ヨコナデ 斜式工型のO・ハケ目	ヨコナデによる織ナデ 斜式工型による織ナデ	ハケ目	良好	浅削れ (10YR 7/4)	にない箇所 (10YR 7/3)	2-3mmの大砂粒多く含む にない箇所 (10YR 7/4)	幅間にスジ状 (白・茶・灰)
第19回	22	E-2-4	布質土器 鉢	口縫部 ナデ	布縫	布縫	良好	浅削れ (7.5YR 7/6)	にない箇所 (7.5YR 7/6)	0.5-1mmの大砂粒を含む にない箇所 (7.5YR 7/6)	幅間にスジ状 (白・茶・灰)	
"	23	E-1	小縫土器 鉢	口縫部 ナデ	布縫	布縫	良好	浅削れ (7.5YR 7/6)	にない箇所 (7.5YR 7/6)	1-4mmの大砂粒を含む にない箇所 (7.5YR 7/6)	幅間にスジ状 (白・茶・灰)	
"	24	E-4	布質土器 鉢	口縫部 ナデ	布縫	布縫	良好	浅削れ (7.5YR 7/6)	にない箇所 (7.5YR 7/6)	1-4mmの大砂粒を含む にない箇所 (7.5YR 7/6)	幅間にスジ状 (白・茶・灰)	
"	25	E-4	布質土器 鉢	口縫部 ナデ	布縫	布縫	良好	浅削れ (7.5YR 7/6)	にない箇所 (7.5YR 7/6)	1-2mmの大砂粒を含む にない箇所 (7.5YR 7/6)	幅間にスジ状 (白・茶・灰)	
"	26	F-5	布質土器 鉢	口縫部 ナデ	布縫	布縫	良好	浅削れ (5YR 7/6)	にない箇所 (5YR 7/6)	1mmの大砂粒を含む にない箇所 (5YR 7/6)	幅間にスジ状 (白・茶・灰)	
"	27	E-2	布質土器 鉢	口縫部 ナデ	布縫	布縫	良好	浅削れ (5YR 7/6)	にない箇所 (5YR 7/6)	0.5mmの大砂粒を含む にない箇所 (5YR 7/6)	幅間にスジ状 (白・茶・灰)	
"	28	F-1	布質土器 鉢	口縫部 ナデ	布縫	布縫	良好	浅削れ (10YR 7/4)	にない箇所 (10YR 7/4)	1mmの大砂粒を含む にない箇所 (10YR 7/4)	幅間にスジ状 (白・茶・灰)	
"	29	F-5	須恵器 環	口縫部 部	ヨコナデ 指掛け	ヨコナデ 指掛け	良好	浅削れ (10YR 7/4)	にない箇所 (10YR 7/4)	細砂粒を含む にない箇所 (10YR 7/4)	幅間にスジ状 (白・茶・灰)	
"	30	D-1	須恵器 環	口縫部 部	ヨコナデ 指掛け	ヨコナデ 指掛け	良好	浅削れ (2.5Y 8/2)	にない箇所 (2.5Y 8/2)	細砂粒を含む にない箇所 (2.5Y 8/2)	幅間にスジ状 (白・茶・灰)	
"	31	D-3	須恵器 環	口縫部 部	ヨコナデ 指掛け	ヨコナデ 指掛け	良好	浅削れ (2.5Y 8/3)	にない箇所 (2.5Y 8/3)	細砂粒を含む にない箇所 (2.5Y 8/3)	幅間にスジ状 (白・茶・灰)	
"	32	E-3	須恵器 環	口縫部 部	ヨコナデ 指掛け	ヨコナデ 指掛け	良好	浅削れ (2.5Y 8/2)	にない箇所 (2.5Y 8/2)	細砂粒を含む にない箇所 (2.5Y 8/2)	幅間にスジ状 (白・茶・灰)	
"	33	D-4	須恵器 環	口縫部 部	ヨコナデ 指掛け	ヨコナデ 指掛け	良好	浅削れ (2.5Y 8/3)	にない箇所 (2.5Y 8/3)	細砂粒を含む にない箇所 (2.5Y 8/3)	幅間にスジ状 (白・茶・灰)	
"	34	F-2	須恵器 環	口縫部 部	ヨコナデ 指掛け	ヨコナデ 指掛け	良好	浅削れ (10YR 7/3)	にない箇所 (10YR 7/3)	1mmの大砂粒を含む にない箇所 (10YR 7/3)	幅間にスジ状 (白・茶・灰)	
"	35	D-1	須恵器 環	口縫部 部	ヨコナデ 指掛け	ヨコナデ 指掛け	良好	浅削れ (2.5Y 8/2)	にない箇所 (2.5Y 8/2)	細砂粒を含む にない箇所 (2.5Y 8/2)	幅間にスジ状 (白・茶・灰)	
"	36	F-3	須恵器 環	口縫部 部	ヨコナデ 指掛け	ヨコナデ 指掛け	良好	浅削れ (2.5Y 8/2)	にない箇所 (2.5Y 8/2)	細砂粒を含む にない箇所 (2.5Y 8/2)	幅間にスジ状 (白・茶・灰)	
"	37	F-4	須恵器 環	口縫部 部	ヨコナデ 指掛け	ヨコナデ 指掛け	良好	浅削れ (2.5Y 8/2)	にない箇所 (2.5Y 8/2)	細砂粒を含む にない箇所 (2.5Y 8/2)	幅間にスジ状 (白・茶・灰)	
"	38	D-1	須恵器 高台付輪	口縫部 部	ヨコナデ 指掛け	ヨコナデ 指掛け	良好	浅削れ (2.5Y 8/1)	にない箇所 (2.5Y 8/1)	細砂粒を含む にない箇所 (2.5Y 8/1)	幅間にスジ状 (白・茶・灰)	
"	39	C-2	須恵器 高台付輪	口縫部 部	ヨコナデ 指掛け	ヨコナデ 指掛け	良好	浅削れ (5Y 6/1)	にない箇所 (5Y 6/1)	細砂粒を含む にない箇所 (5Y 6/1)	幅間にスジ状 (白・茶・灰)	
"	40	D-4	須恵器 高台付輪	口縫部 部	ヨコナデ 指掛け	ヨコナデ 指掛け	良好	浅削れ (2.5Y 7/3)	にない箇所 (2.5Y 7/3)	1-2mmの大砂粒を含む にない箇所 (2.5Y 7/3)	幅間にスジ状 (白・茶・灰)	
"	41	D-3	須恵器 高台付輪	口縫部 部	ヨコナデ 指掛け	ヨコナデ 指掛け	良好	浅削れ (2.5Y 5/2)	にない箇所 (2.5Y 5/2)	細砂粒を含む にない箇所 (2.5Y 5/2)	幅間にスジ状 (白・茶・灰)	
"	42	E-1	須恵器 高台付輪	口縫部 部	ヨコナデ 指掛け	ヨコナデ 指掛け	良好	浅削れ (2.5Y 6/2)	にない箇所 (2.5Y 6/2)	細砂粒を含む にない箇所 (2.5Y 6/2)	幅間にスジ状 (白・茶・灰)	

第20図	43	F・G-5	刃歯器 口輪器 研 研 研	ヨコナデ ヨコナデ 格子目刺き 格子目刺き ヨコナデ ヨコナデ ヨコナデ	ヨコナデ ナテ(彫りしている) 圓心円印き 圓心印き ダチ方角に平行な切き ヨコナデ ヨコナデ ヨコナデ	ヘラ切り 良好 良好 良好 良好 良好 良好 良好	良好 良好(2.5Y 10YR 10YR 10YR 2.5Y 7.5Y 5YR)	にぶい質感 (10YR 8/2) (10YR 8/3) (10YR 8/3) 良好 良好 良好 良好	にぶい質感 (10YR 7/3) に白(2.5Y 8/3) 淡黄褐色(0YR 8/0) 灰H (2.5Y 8/2) (7.5Y 6/2) 灰(5Y 5/1) 香氣(一部分)GY GYR	1~2mmの凹部を含む (口・系・灰) 条・葉の細胞と1mmの大 粒少々含む 0.5mm前後の系・葉の細孔 條を含む 口・らず本・灰の細粒を 含む に白い赤穂 0.5~2mm前後の系・白 ほい色の細胞を含む
第21図	44		刃歯器 口輪器 研 研 研	ヨコナデ ナテ(彫りしている) 圓心円印き 圓心印き ダチ方角に平行な切き	ヨコナデ 良好 良好 良好 良好	良好 良好 良好 良好 良好	良好 良好(2.5Y 10YR 10YR 10YR 2.5Y 7.5Y 5YR)	にぶい質感 (10YR 8/2) に白(2.5Y 8/3) 淡黄褐色(0YR 8/0) 灰H (2.5Y 8/2) (7.5Y 6/2) 灰(5Y 5/1) 香氣(一部分)GY GYR	にぶい質感 (10YR 7/3) に白(2.5Y 8/3) 淡黄褐色(0YR 8/0) 灰H (2.5Y 8/2) (7.5Y 6/3) に白い赤穂 0.5~2mm前後の系・白 ほい色の細胞を含む	
"	45		刃歯器 口輪器 研 研 研	ヨコナデ ヨコナデ ヨコナデ ヨコナデ ヨコナデ	ヨコナデ 良好 良好 良好 良好	良好 良好 良好 良好 良好	良好 良好(2.5Y 10YR 10YR 10YR 2.5Y 7.5Y 5YR)	にぶい質感 (10YR 8/2) に白(2.5Y 8/3) 淡黄褐色(0YR 8/0) 灰H (2.5Y 8/2) (7.5Y 6/2) 灰(5Y 5/1) 香氣(一部分)GY GYR	にぶい質感 (10YR 7/3) に白(2.5Y 8/3) 淡黄褐色(0YR 8/0) 灰H (2.5Y 8/2) (7.5Y 6/3) に白い赤穂 0.5~2mm前後の系・白 ほい色の細胞を含む	
"	46		刃歯器 口輪器 研 研 研	ヨコナデ ヨコナデ ヨコナデ ヨコナデ ヨコナデ	ヨコナデ 良好 良好 良好 良好	良好 良好 良好 良好 良好	良好 良好(2.5Y 10YR 10YR 10YR 2.5Y 7.5Y 5YR)	にぶい質感 (10YR 8/2) に白(2.5Y 8/3) 淡黄褐色(0YR 8/0) 灰H (2.5Y 8/2) (7.5Y 6/2) 灰(5Y 5/1) 香氣(一部分)GY GYR	にぶい質感 (10YR 7/3) に白(2.5Y 8/3) 淡黄褐色(0YR 8/0) 灰H (2.5Y 8/2) (7.5Y 6/3) に白い赤穂 0.5~2mm前後の系・白 ほい色の細胞を含む	
"	47		刃歯器 口輪器 研 研 研	ヨコナデ ヨコナデ ヨコナデ ヨコナデ ヨコナデ	ヨコナデ 良好 良好 良好 良好	良好 良好 良好 良好 良好	良好 良好(2.5Y 10YR 10YR 10YR 2.5Y 7.5Y 5YR)	にぶい質感 (10YR 8/2) に白(2.5Y 8/3) 淡黄褐色(0YR 8/0) 灰H (2.5Y 8/2) (7.5Y 6/2) 灰(5Y 5/1) 香氣(一部分)GY GYR	にぶい質感 (10YR 7/3) に白(2.5Y 8/3) 淡黄褐色(0YR 8/0) 灰H (2.5Y 8/2) (7.5Y 6/3) に白い赤穂 0.5~2mm前後の系・白 ほい色の細胞を含む	



城ヶ尾遺跡遠景



アカホヤ上面遠景



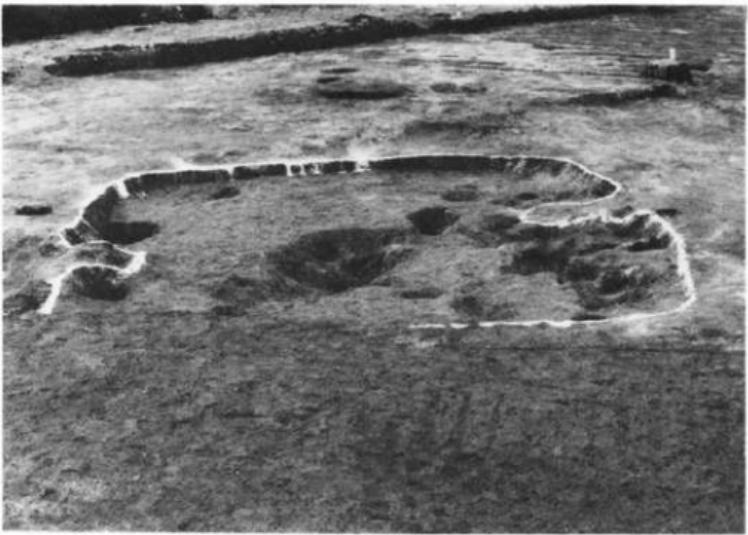
御池ボラ上面遠景



市来式土器出土状況



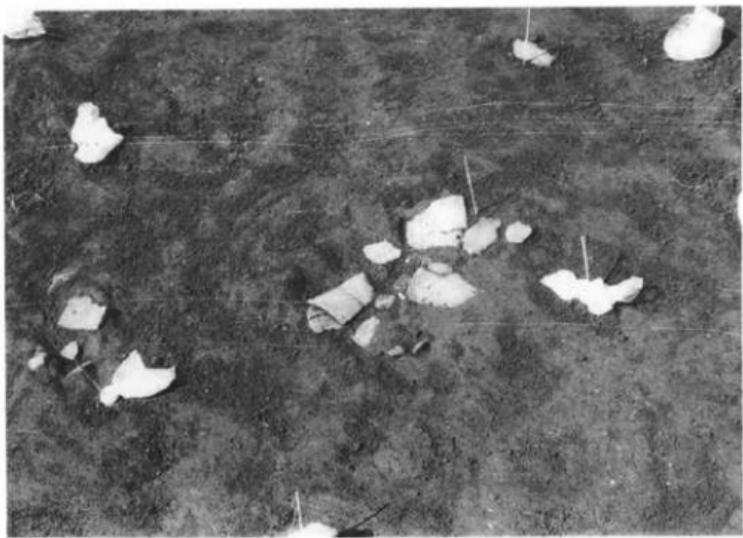
孔列土器出土状况



A地区1号住居



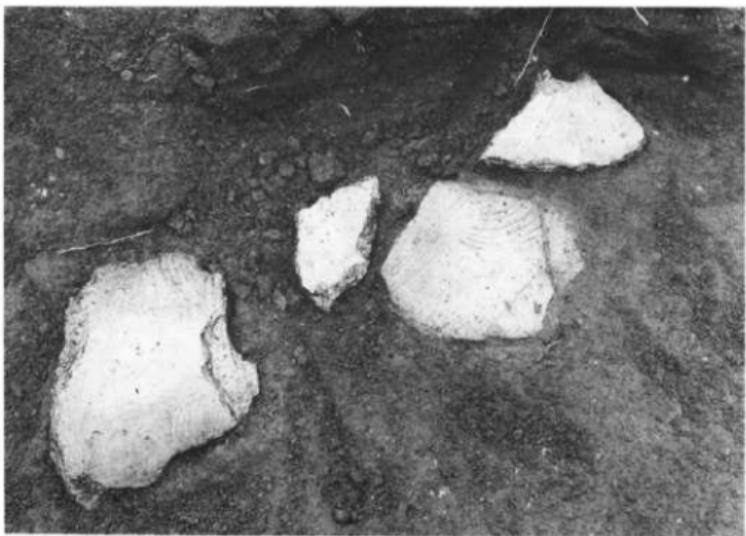
1號住居石庖丁出土狀況



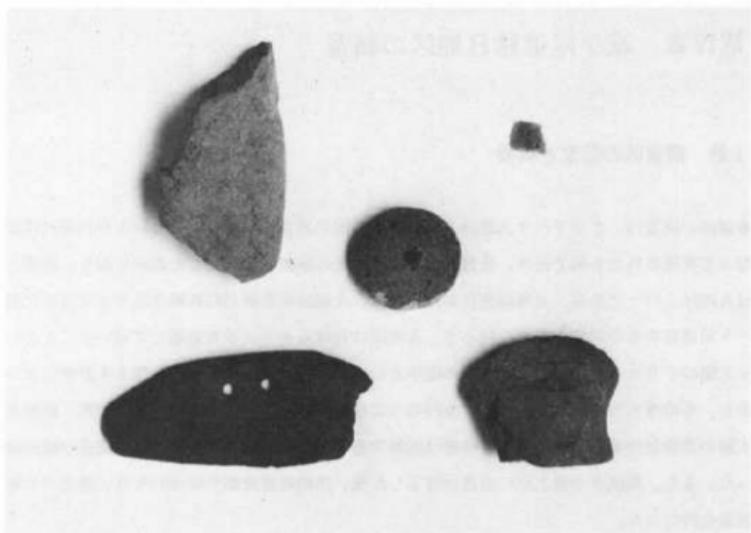
1號住居長頸壺出土狀況



A地区弥生土器出土状况



A地区重弧文器台出土状况



A地区出土石器



A地区 1号掘立柱建物

## 第IV章 城ヶ尾遺跡B地区の調査

### 第1節 調査区の設定と概要

本遺跡の調査は、クラブハウス建設予定地のA地区の調査終了後、電動カート格納庫の建設に伴なって実施されたものである。位置的には、A地区の南東側に隣接した場所であり、遺跡としてはA地区と同一である。発掘調査にあたっては、A地区南東側の格納庫建設予定地及び北側のカート用通路をその対象とした。従って、A地区におけるグリッドを拡張して用いることとし、5m方眼のグリッドを設定した。調査の順序としては、調査対象区全面の耕作土を重機によって除去し、その後人力によって掘り下げを行なうこととした。人力による掘り下げの際、御池ボラ層上層の遺物包含層内では、遺構の検出は困難であったため、御池ボラ層上面が遺構の検出面となつた。また、御池ボラ層上位の調査が終了した後、格納庫建設部分については、御池ボラ層下の調査を行なつた。

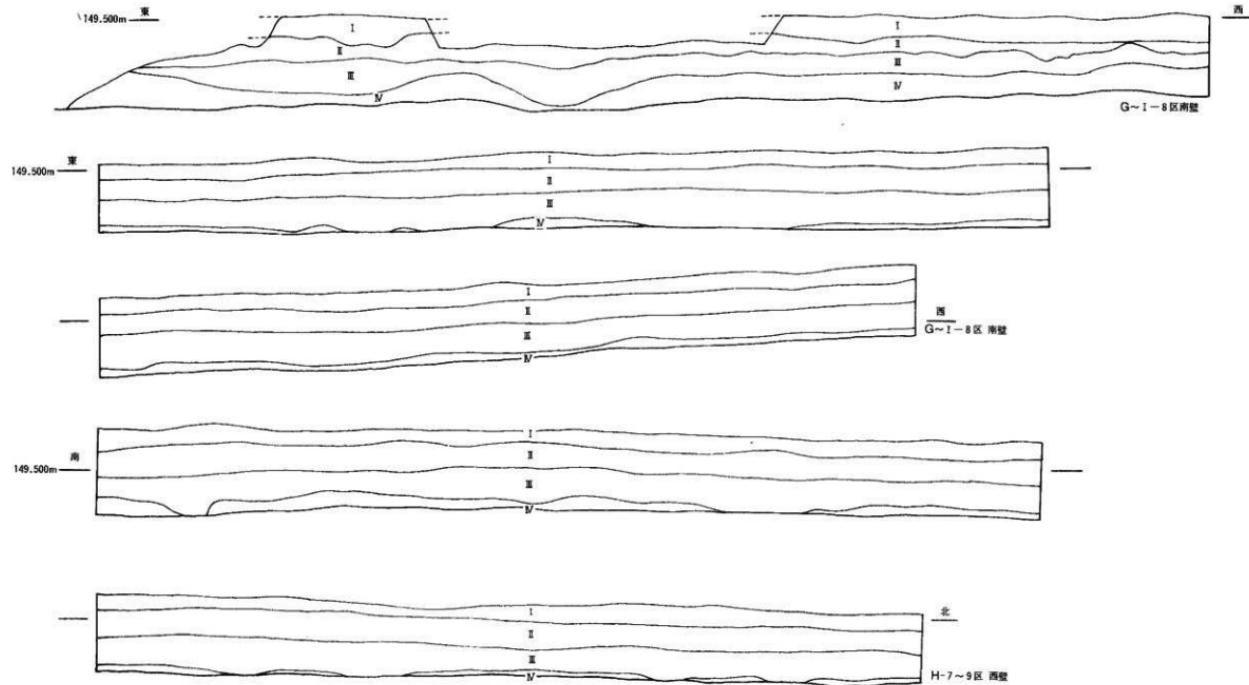
調査の結果、御池ボラ層下位においては縄文時代前期の遺物が出土し、その上位においては、縄文時代後・晚期、弥生時代後期、平安時代の遺物が出土した。また、遺構も弥生時代後期の堅穴住居跡・上塙をはじめとしてピット・溝状遺構が検出された。

調査は、昭和62年5月30日～7月6日までの11日間で高城町教育委員会によって行なわれ、調査面積は700m<sup>2</sup>であった。

### 第2節 包含層の状態

B地区遺跡における層序は、基本的にA地区と同一である。第I層が耕作土、第II層がボラをほとんど含まない黒色土層、第III層がボラを僅かに含む黒色土層、第IV層がボラを含む黒褐色土層、第V層の御池ボラ層の順となっており、さらにその下位に第VI層の黒色粘質土層、第VII層暗褐色土層と続いた。縄文時代前期の曾畠式土器は第VI層黒色粘質土層の上位で出土し、他の縄文後・晚期の土器、弥生土器、土師器、須恵器等の遺物は、第II層から第VII層にかけて出土した。

調査着手前の地形はほぼ平坦であったが、主要遺物包含層である第III層は、調査区南西部より北東部へ緩やかに傾斜して安定した堆積状況を呈していた。



第1図 遺構分布図土層図

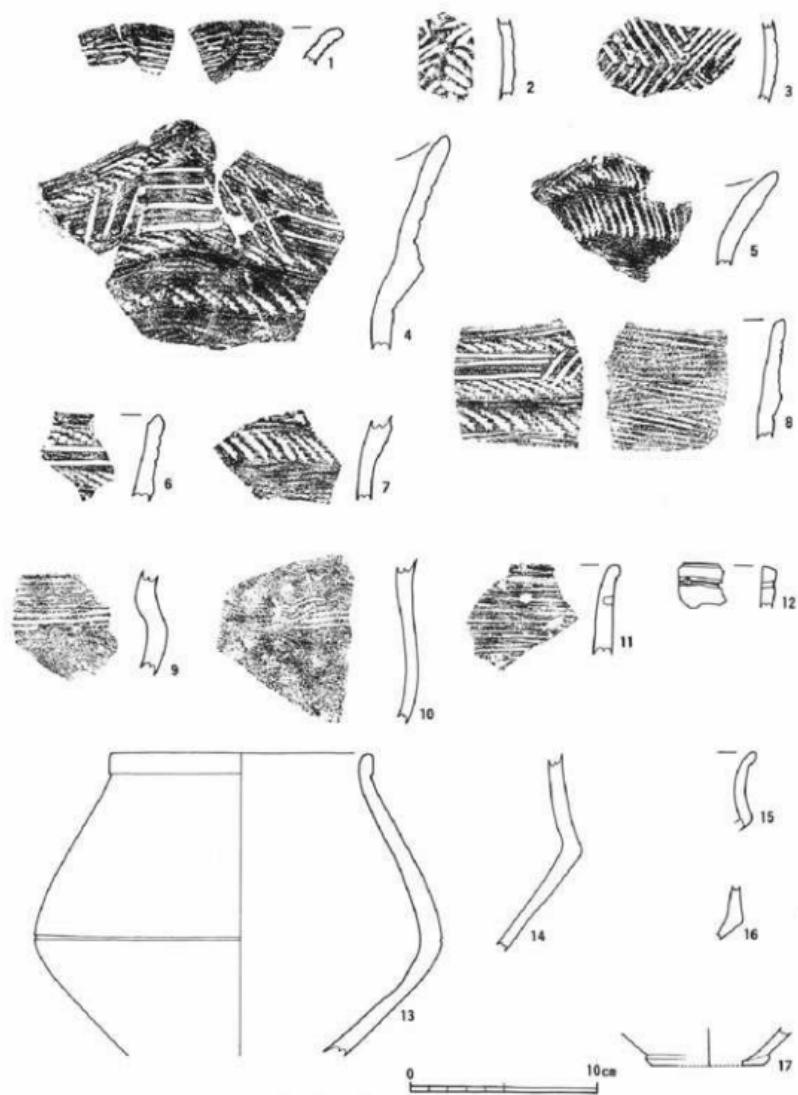
### 第3節 繩文時代の土器

1～3は、御池ボラ扁直下の第VI層黒色粘質土層より出土した曾畠式土器である。1は外反する口縁部で、口唇部は丸みを持つ。外面及び内面には、先端の尖った工具により、1～2cm程度の断面V字状の平行沈線を斜め下方より施す。ていねいなナデ調整で色調は暗赤褐色を呈する。2・3は胴部片で、外面には先端が丸みを持つ平坦な棒状工具により幾何学文を施文する。内外面ともにていねいなナデ調整である。色調は2が明赤褐色、3が赤褐色を呈する。1～3ともに滑石は含まず細かい黒色粒が目立つ。焼成は良好である。

4～10は、貝殻文系の市来式土器である。口縁部は波状口縁であり、口唇部断面は三角形を呈する。内外面ともに貝殻条痕による調整を施した後、口縁部外面はナデ調整を施し、棒状工具による沈線・貝殻腹縁による刺突文を施す。9・10は胴部片で内・外面ともにナデ調整で、上半部に貝殻条痕調整の痕跡が残る。9は屈曲部を有するが10はゆるやかに内傾しながら下半部へ続く。色調は6が明赤褐色、8がにぶい赤褐色で、他は暗赤褐色である。胎土は5・10が1mm程度の大きめの白色砂粒が目立つ。他は、白色・灰色・黒色の細かな砂粒を含む。

11・12は、孔列連点文土器である。11は、先細りの口縁部がゆるやかに外反しており、丸みを帯びた「コ」字型の肥厚する口唇部で終る。調整は外面が横位、内面が斜位の条痕調整であるが、内面の口唇部直下の幅2cm程度はナデ調整である。穿孔は貫通しておらず、孔口径が5mm、孔底径が3mmで先細りの工具で施している。また孔口周辺部は条痕の摩耗が観察される。胎土には長石・石英を含み、茶色・黒色の砂粒が目立つ。色調はにぶい橙色を呈し、焼成は良好である。12は斜めに直行して立ち上がる口縁部で、外面に稜を行す。ナデ調整の後、幅4mm程度の沈線を外面に巡らせ、沈線内に穿孔を施す。色調は灰褐色を呈し、焼成は良好である。

13は、精製磨研の壺型土器である。丸みを帯びた平底から斜めに直行して立ち上がり、胴部より僅かに内湾しながら先細り、肥厚する口縁部で終る。最大経を測る胸部には、幅2mmの沈線が巡る。内外面ともに平滑な研磨調整である。胎土には、3mm程度の砂粒を僅かに含むが、全体的にきめが細かく、白色の細砂粒も目立つ。色調は灰褐色を呈する。14は口縁部が外反する深鉢型土器である。底部より斜位に直行して立ち上がり、胴部で屈曲して弓なり状に外反する口縁部で統く。内外面ともに横位のナデ調整である。色調は褐灰色を呈し、胎土には1～2mm程度の白色・灰色・茶色の石粒が目立つ。15～18は精製磨研の浅鉢である。15は、やや丸みを持つ胴部屈曲部より弓なりに外反する先細りの頸部を有し、口縁部は丸く終る。風化しているが、内外面ともに平滑な研磨調整を施す。胎土中に、径1～3mmの明黄褐色の軽石粒を含んでいるのが特徴である。色調はにぶい黄橙色を呈し、良好な焼成である。16は明瞭な屈曲部を有する胴部片である。内外面ともに研磨調整が横位に施され、堅緻な作りである。また、胎土もきめが細かく、白色の



第2図 縄文土器実測図

細砂粒が僅かに目立つ程度である。色調は内外面ともに明褐色を呈する。17は平底で上方へは僅かに丸みを持って立ち上がる。色調は、外面がにぶい褐色、内面が黒褐色を呈する。平滑な研磨調整で、胎土には白色細砂粒が目立つ。

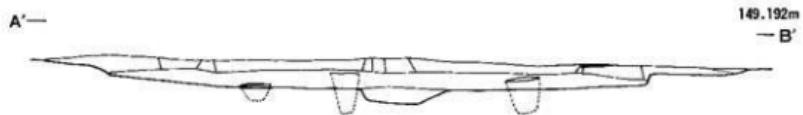
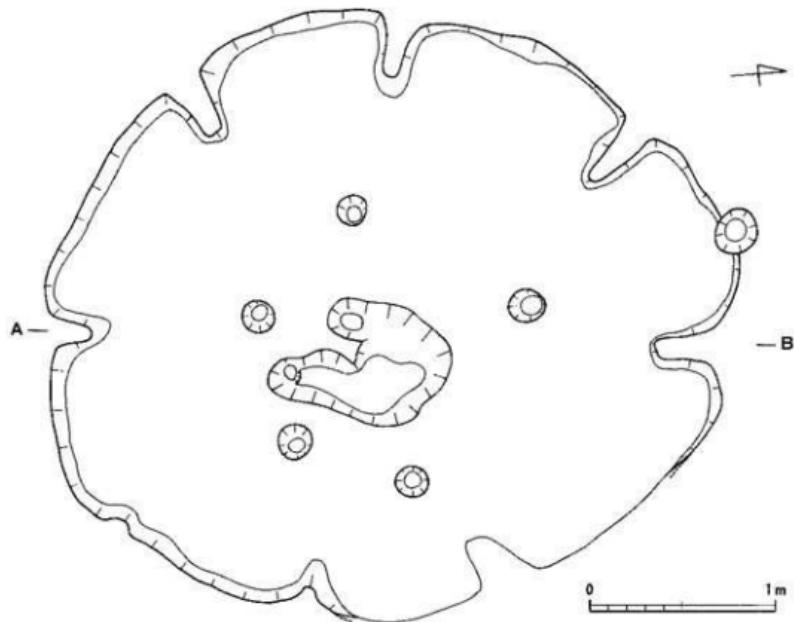
## 第4節 弥生時代の遺構と遺物

### ① 遺構

弥生時代の遺構としては、突出壁を有する竪穴住居跡2軒、土壙8基が検出された。いずれも第V層（御池ボラ層）上面が遺構確認面となった。A地区においてすでに弥生時代の竪穴住居跡が1軒検出されていたので、今回検出された竪穴住居跡は、SA-2・SA-3とした。土壙は遺物の出上がりがみられなかったが、他の時代の出土土器が少なく出土状況の重なりが見られないこと、2軒の竪穴住居跡周辺部にそれぞれ集中していることや埋土状況等から判断して弥生時代の土壙と判断した。

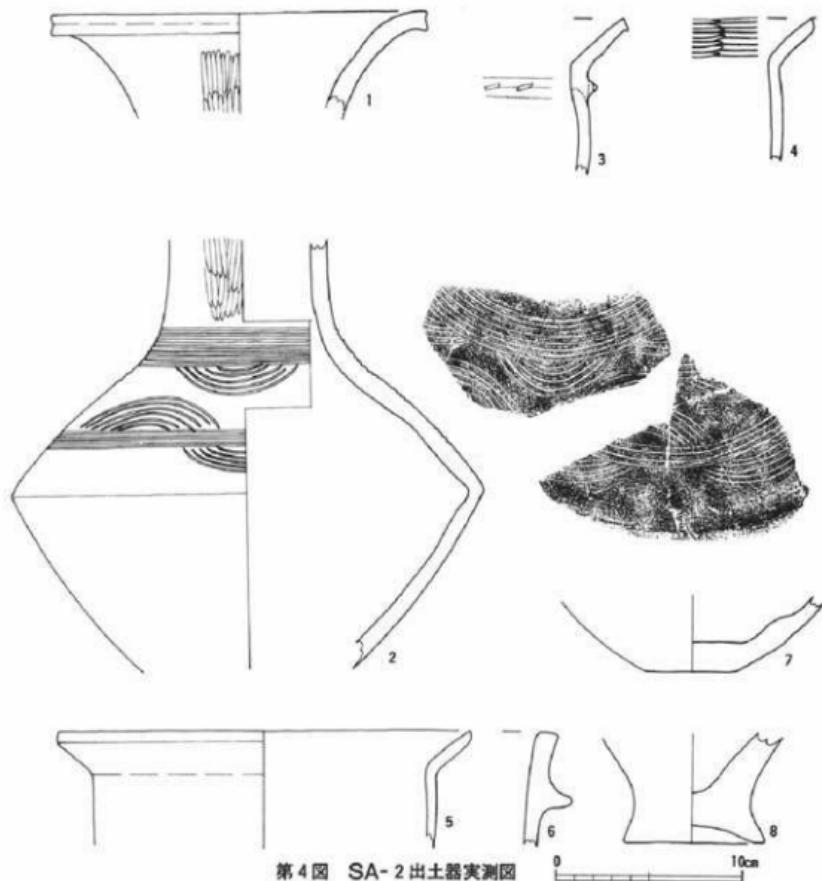
#### SA-2（第3図）

包含層の掘り下げの過程において、H・I-7・8区に弥生土器の出土が集中していたので遺構の存在が推察されたが、竪穴住居跡として確認されたのは御池ボラ層上面まで掘り下げた段階であった。北東部はノリ面の整備のため削平され、床面の輪郭が僅かに確認できる程度であった。平面形は、南北にやや長い橢円形を呈し、長径3.8m 短径3.3mを測る。突出壁は7箇所確認されたが、削平部分に1つ存在していたと推察され、計8箇所の突出壁を有するものと思われる。検出面からの深さは、壁際で10~20cmを測る。そして中央部へ向けて僅かに緩やかに深くなり、中央部では検出面より約30cmの深さであった。床面はほぼ平坦で、貼り床・壁帶溝はみられなかった。8箇所の突出壁のうち5箇所は残存状態が良好であったが、南側の小さいものは15cm程度張り出しているのみで、残る東側の2箇所も削平を受けていた。ピットは5箇所検出されたが、4本柱の可能性が大きい。また、遺構検出時に、中央部に炭化物を多く含んだ範囲がみられたが掘り下げによって焼上が堆積した焼跡と考えられる凹部を確認した。



第3図 SA-2 実測図

出土した土器は少ないが、ほとんどが甕である。高環・器台は出土していないが、注目されるのは、重弧文長頸壺が出土したことである。頸部と肩部のつぎ目に8条・肩部中位に5条の沈線を巡らせ、下向きの重弧文は5条、上向きの重弧文は6条の沈線で描き配置している。この長頸壺は、住居跡南側の壁際にまとまって出土したが、口縁部はすぐ近くで出土した1が胎土・色調調整とともに類似しており、同一の可能性がある。甕は突帯を有するものと無いものが出土してい



第4図 SA-2出土器実測図

る。石器としては、磨製の石庖丁・石鐵等が出土しており、それぞれの未完成品・素材・破損品等が出土している。(第12・13図) 土器・石器ともに住居跡では分布の偏りがみられ、炉跡と壁際に出土が集中する傾向がみられる。特に、石器は、炉跡の周辺部に素材及び剝片が集中し、壁際には製品が出土している。

### S A - 3 (第15図)

調査区北側のG・H-1～4区の遺物包含層の掘り下げがほぼ終了し、第Ⅲ層（御池ボラ層）上面での遺構の調査を行なった際、H-2区に突出壁を有する堅穴住居跡の一部が確認されたので、発掘区を拡張して調査を行なった。平面形はほぼ円形を呈していたが、南東部の約3分の1の部分は、ノリ面の整備のため既に削平されていた。突出壁は、大きく張り出し形状の明瞭なものが5箇所、小さなもののが2箇所の計7箇であったが、削平部分にも1箇所あったものと考えられる。突出壁は同規模のものが等間隔に並んでいるのではなく、小型のものが変則的に混在するという状況であった。張り床・壁帯溝・ベッド状遺構等は検出されなかったが、床面は固く締まっていた。ピットは3箇所検出されたが、柱穴として考えられるのは突出壁先端部に対応した2箇所である。また、遺構検出時に、S A - 2と同様炭化粒を多く含んだ範囲が住居跡中央部に見られ、掘り下げの結果炉跡であることが判明した。しかし、中央部の炉跡と考えられる凹部には、炭化粒を多量に含んだ層は検出されたものの焼土はその粒子を僅かに含んでいるのみで、S A - 2のような明瞭な層としての堆積はみられなかった。そして、住居跡南側の削平部分については、約10cm程度の段差をもって床面が下がっており、当初は他の住居跡との切合いかとも考えられたが、断面の観察の結果地すべり等によるずれであることが判明した。

S A - 3で出土した土器は、複合口縁壺・壺・甕・高杯・鉢等であったが、いずれも破片であり、完形品は出土していない。土器量としては甕が最も多かった。9・10は壺口縁部で10は口唇部に櫛描き波状文を施文する。11も櫛描き波文を施文する複合口縁壺である。15は台付き鉢で内外面ともにいねいなミガキ調整を施している。石器は、半磨製の抉り入り石庖丁1点と磨製石鎌の破片1点が出土したのみであり、S A - 2のような剥片・未製品等は出土しなかった。（第12図3・11）

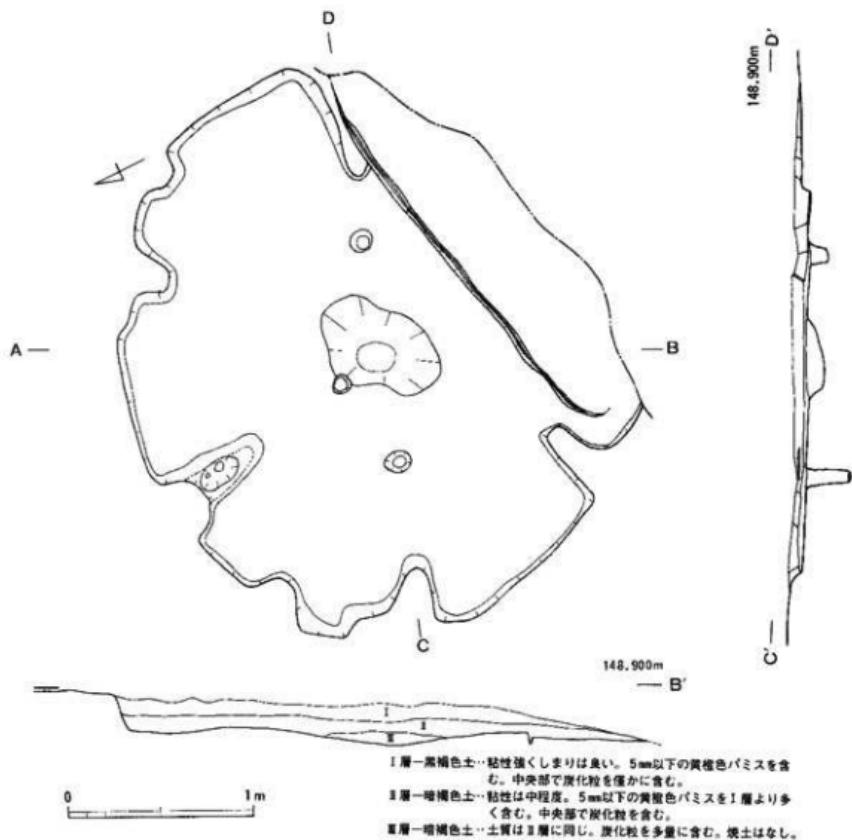
遺物の分布状況としては、S A - 2のような偏りは見られなかった。

### 土壤 (第8・9図)

S C - 1 G-8区で検出され、240cm×85cmの隅丸長方形プランである。2箇所のピットを有する。

S C - 2 H-7区で検出され、210cm×90cmの「ひょうたん」形の平面プランである。床面はほぼ平坦で中央部にピットを1箇所有する。

S C - 3 G・H-6区で検出され、165cm×85cmの横円形を呈する。中央部に1箇のピットを有する。



第5図 SA-3 実測図

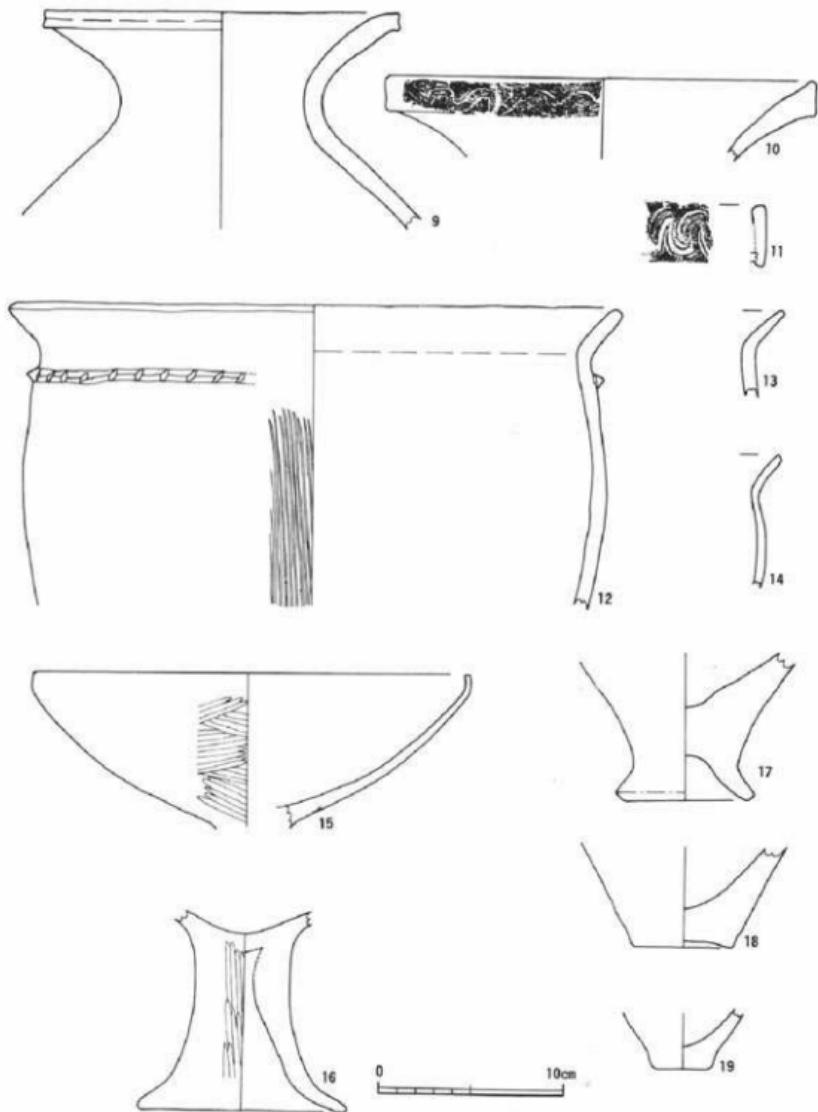
SC-4 H-7区で検出され、165cm×85cmの楕円形プランである。南側から北側へ深くなっているが、床面はほぼ平坦である。

SC-5 G-1区で検出され、225cm×95cmの楕円形プランである。床面では東側と西側に2箇所の凹部があり、西側には段差があつて浅い部分がある。

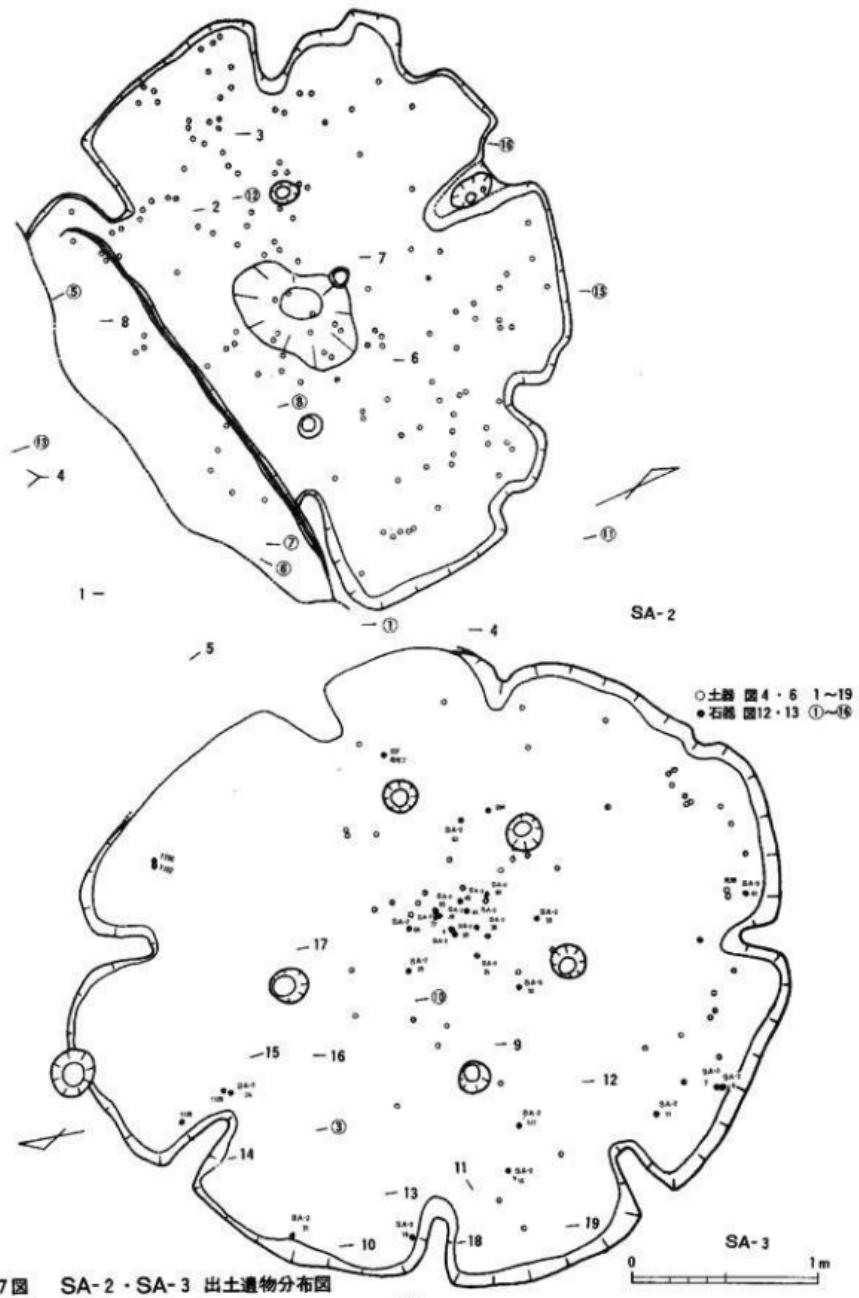
SC-6 G-1区で検出され、160cm×90cmの楕円形プランである。床面は平坦で中央部にピットを1箇所有する。

SC-7 G-1区で検出され、195cm×85cmの隅丸方形状プランである。南西部に凹部があり、北東部に35cm×20cmの楕円形のピットを有する。

SC-8 G-2区で検出され、150cm×90cmの楕円形プランである。2段の掘り込みになつており、中央部に1箇所のピットを有する。

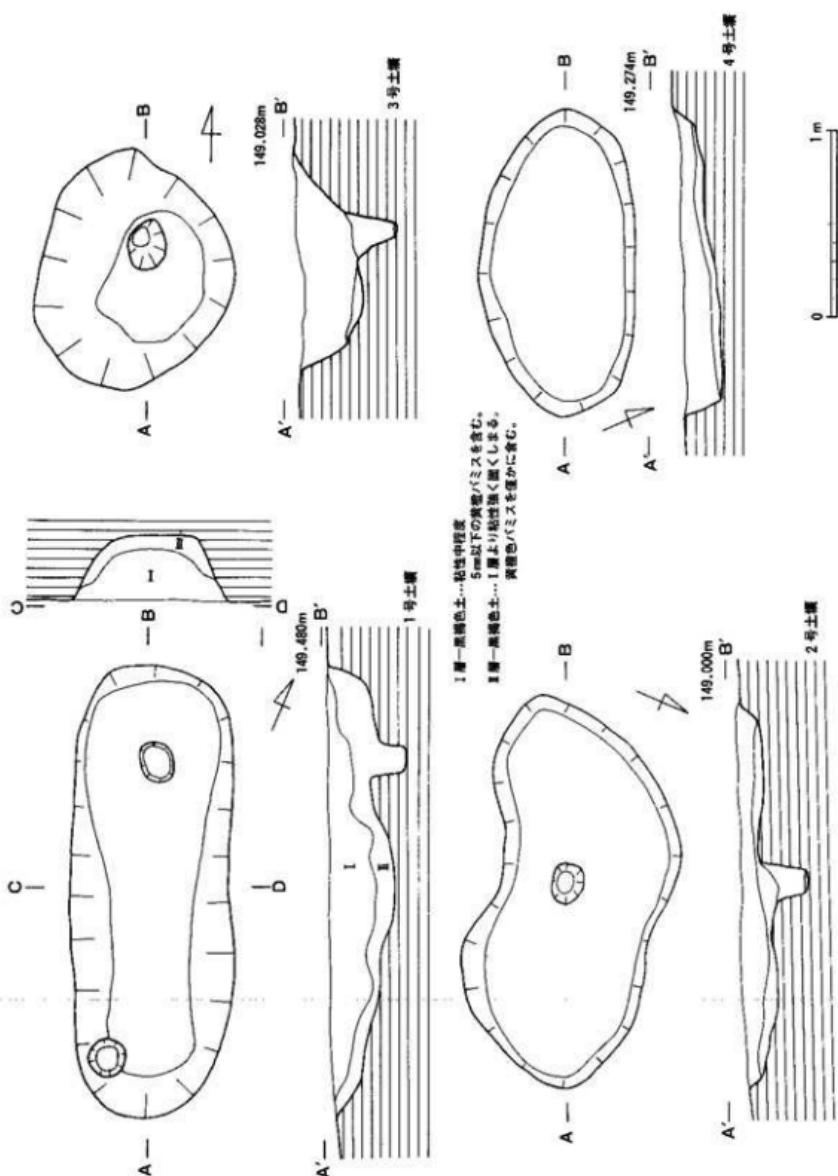


第6図 SA-3出土土器実測図



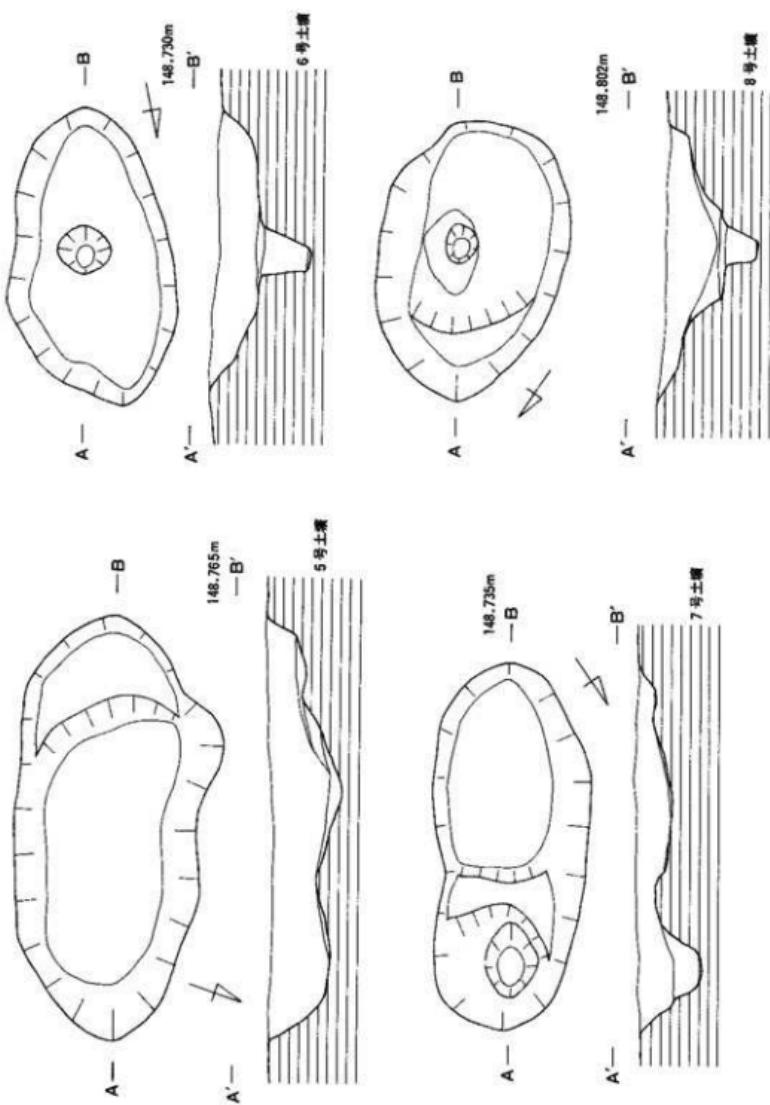
第7図 SA-2・SA-3 出土遺物分布図

第8図 土壤実測図



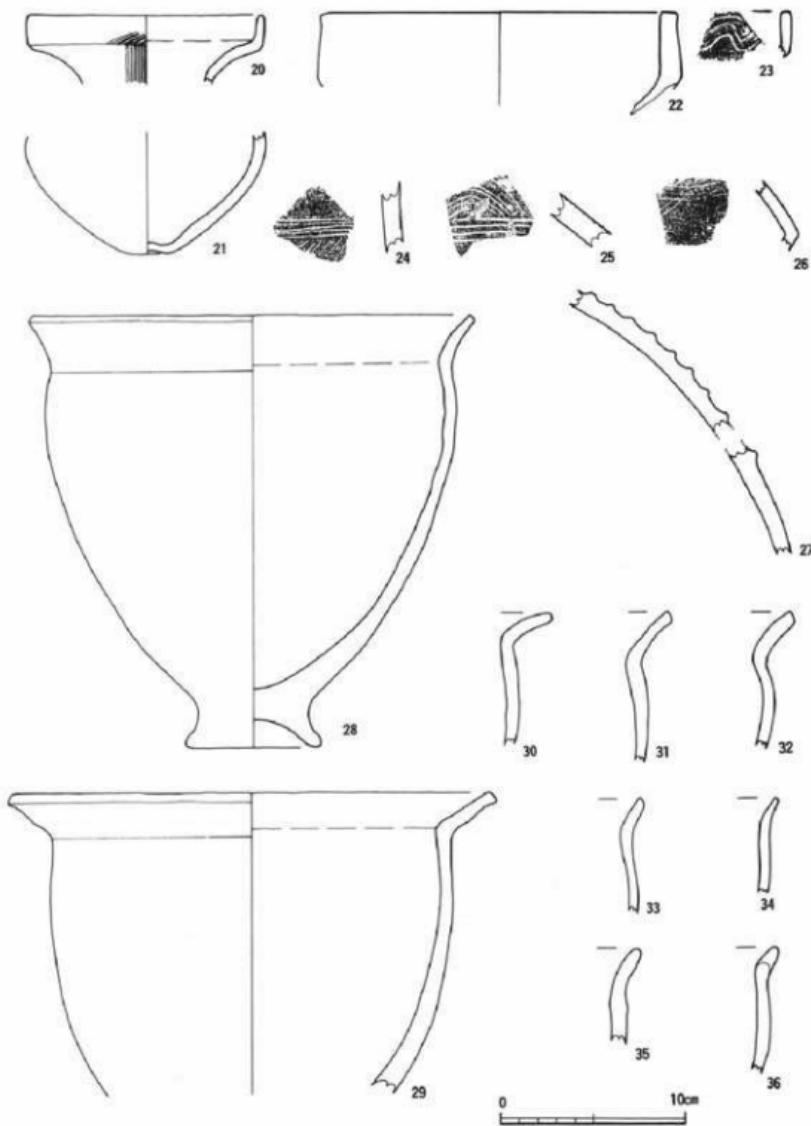
第9図 土壌実測図(2)

1m

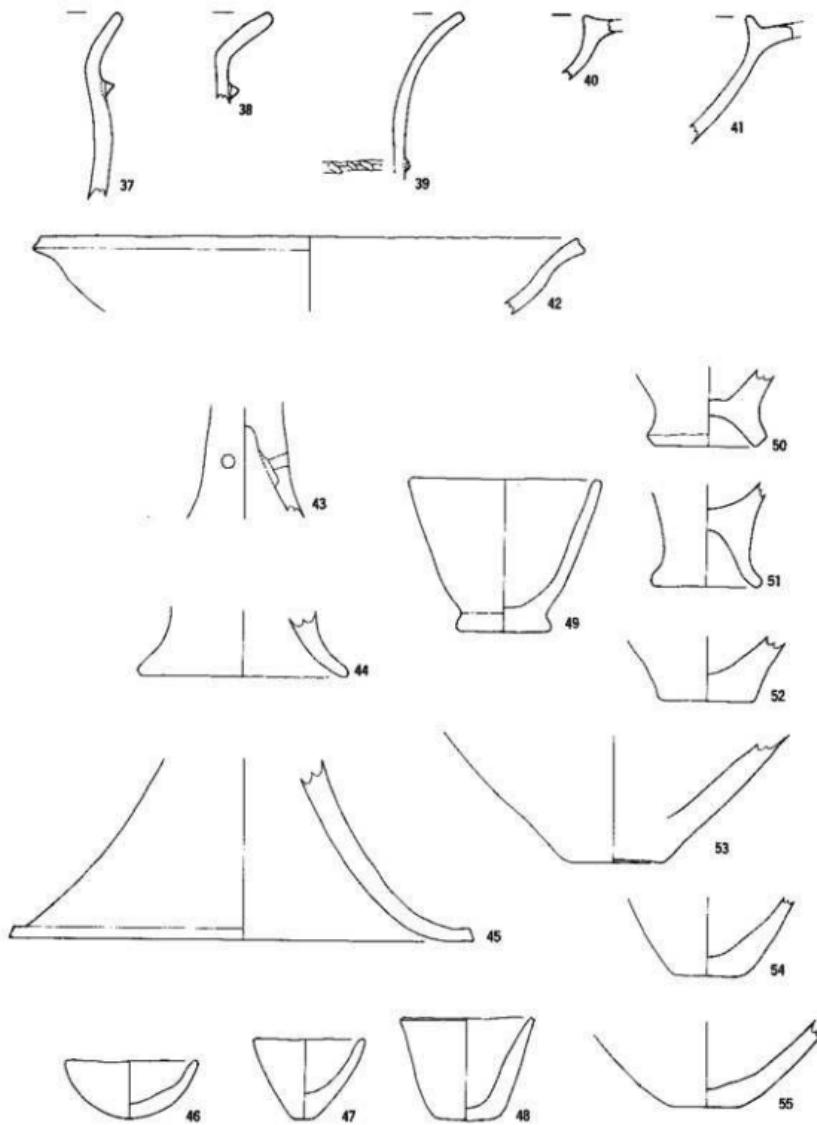


## ② 弥生時代の土器（第10・11図）

20～23は複合口縁壺の口縁部及び底部である。口縁部はいづれも口縁反転部に明瞭な稜を有しない。23は外面に櫛描波状文を施す。24～26は長頸壺の頭部・肩部・胴部片であるが、別個体である。24・25は、器壁の厚さからみてSA-2出土の長頸壺と同程度の大きさのものと思われるが、26は小型で作りも堅緻である。27は、肩部に張付け突帯を有する壺であるが、胴部下半部の突帯の有無は不明である。28～39は壺で、突帯の有無により大別される。突帯の無いもの（28～36）の中では、口唇部が「コ」字型で口縁部の外反が明瞭であるもの（28～32）と、口唇部に丸みがあり口縁部の外反がゆるやかなものとがある。37は、口縁部の外反がゆるやかで口縁部直下に突帯を有する。38は、頸部に明瞭な稜を有し、口縁部が肥厚する。39は、口縁部がゆるやかに大きく外反し、突帯も下がる。40・41は、脚付鉢の口縁部と考えられる。口縁部はやや内湾ぎみに立ち上る。張り出し部を有するのが特徴的であるが、どの程度の張り出しかは不明である。42は、高坏の坏部である。口縁部には屈曲部を有し、口唇部は僅かに張り出す。43～45は高坏の脚部である。43は穿孔を有し、堅緻な作りである。44は脚部先端が丸く、張り出しありが弱いが、45は脚部先端の稜が明瞭で大きな広がりを持つ。46～49は手づくねのミニチュア土器である。46は口唇部に丸みを持ち、底部も丸く、器高よりも口縁径が大きい。47は口唇部が丸く底部は小さな平底で、器高と口縁径がほぼ同じである。48は、46・47の口縁部・胴部が内湾ぎみに立ち上がるのに対して、僅かに外反ぎみに立ちあがっており、先細りの口縁部になっている。口唇部は「コ」字型で、外面に稜を有する。底部は安定した平底である。51～56は壺及び甕の底部である。50は上げ底で、外面に明瞭な稜を有する。51は、50よりも強い上げ底で先端部は丸みを帯びる。52～55は平底の底部で、外反ぎみに立ち上がるものの52、ほぼ斜めに直線的に立ち上がるものの53、ゆるやかな丸みを帶びて立ち上がるものの54・55等がある。



第10図 弥生土器実測図(1)



第11図 弥生土器実測図(2)

0 10cm

## 新生土器觀察表

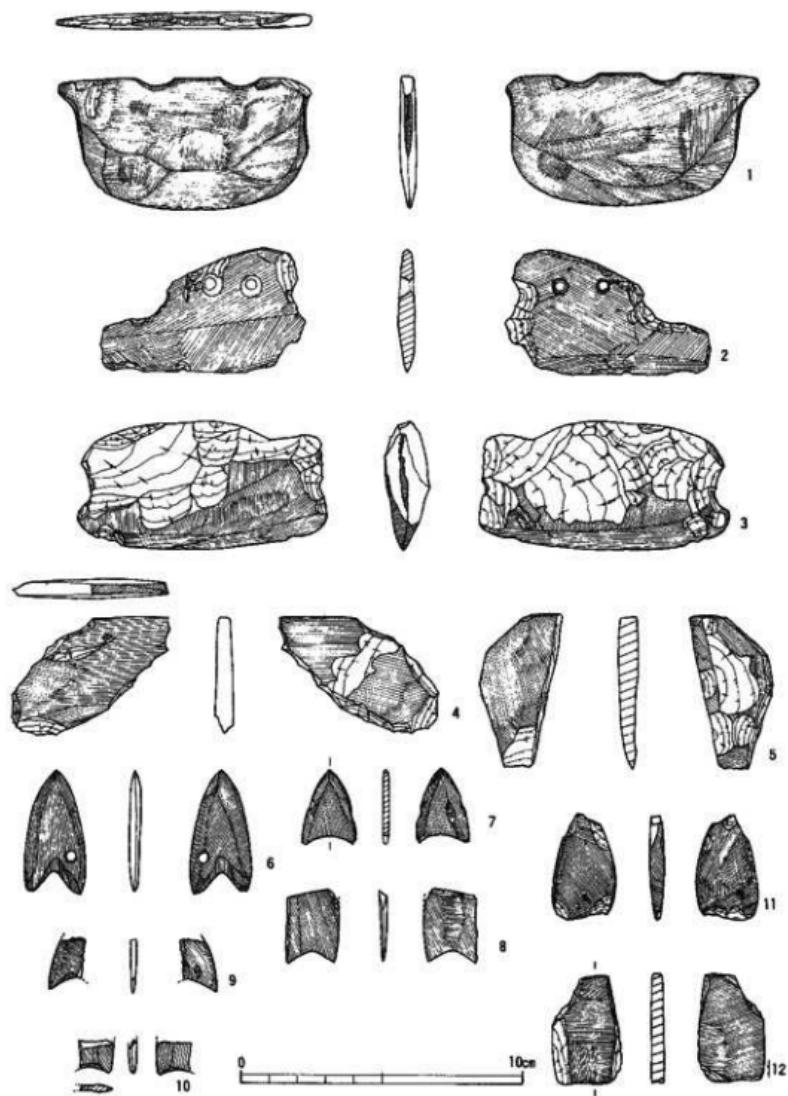
圖面番号	遺物番号	遺物名	器種	器部		外 色		内 色		施 面		施 土		備 考 分類
				外 色	内 色	施 面	施 土	内 色	施 面	施 面	施 土	内 色	施 土	
第4圖	1	SA-2	瓦瓶	口縫部	白・ヨココナデ	良好	黄褐色	5/8	黑褐色	1-2mmの白色・深色の 施土跡を含む	1-2mmの白色・深色の 施土跡を含む	白・灰色の砂粒を多く 含む	白・灰色の砂粒を多く 含む	無田式土器
"	2	SA-2	長瓶	肩 部	白・ヨココナデ	良好	黄褐色	5/6	黑褐色	10YR	3/1	白・灰色の砂粒を多く 含む	白・灰色の砂粒を多く 含む	無田式土器
"	3	SA-2	長瓶	肩 部	白・ヨココナデ	良好	黄褐色	6/3	黑褐色	10YR	3/1	白・灰色の砂粒を多く 含む	白・灰色の砂粒を多く 含む	無田式土器
"	4	SA-2	長瓶	肩 部	白・ヨココナデ	良好	黄褐色	6/3	黑褐色	10YR	6/4	1-3mmの白色・黒褐色砂 粒を含む	1-3mmの白色・黒褐色砂 粒を含む	無田式土器
"	5	SA-2	壺	肩 部	白・ヨココナデ	良好	黄褐色	6/4	黑褐色	10YR	5/6	1-2mmの透明砂粒を多く 含む	1-2mmの透明砂粒を多く 含む	無田式土器
"	6	SA-2	壺	肩 部	白・ヨココナデ	良好	黄褐色	7/5	黑褐色	10YR	5/6	1-3mmの白色・黒褐色砂 粒を含む	1-3mmの白色・黒褐色砂 粒を含む	無田式土器
"	7	SA-2	壺	底 部	白・ヨココナデ	良好	黄褐色	6/6	黑褐色	10YR	7/4	1-2mmの白色・深色の砂粒を多 く含む	1-2mmの白色・深色の砂粒を多 く含む	無田式土器
"	8	SA-2	壺	底 部	白・ヨココナデ	良好	黄褐色	6/8	黑褐色	10YR	2/1	1-2mmの白色・深色の砂粒を多 く含む	1-2mmの白色・深色の砂粒を多 く含む	無田式土器
第6圖	9	SA-3	壺	肩 部	白・ヨココナデ	良好	黄褐色	9/8	黑褐色	10YR	6/6	1-2mmの白色・深色の砂粒を多 く含む	1-2mmの白色・深色の砂粒を多 く含む	無田式土器
"	10	SA-3	壺	肩 部	白・ヨココナデ	良好	黄褐色	7/3	黑褐色	10YR	7/6	1-2mmの砂粒を多く含む	1-2mmの砂粒を多く含む	無田式土器
"	11	SA-3	壺	肩 部	白・ヨココナデ	良好	黄褐色	6/4	黑褐色	10YR	6/6	1-2mmの白色砂粒が目立 つ	1-2mmの白色砂粒が目立 つ	無田式土器
"	12	SA-3	壺	肩 部	白・ヨココナデ	良好	黄褐色	7/4	黑褐色	10YR	7/4	2-5mmの白色・深色の砂粒 を多く含む	2-5mmの白色・深色の砂粒 を多く含む	無田式土器
"	13	SA-3	壺	肩 部	白・ヨココナデ	良好	黄褐色	7/6	黑褐色	10YR	7/4	1-3mmの白色・深色砂粒 を多く含む	1-3mmの白色・深色砂粒 を多く含む	無田式土器
"	14	SA-3	壺	肩 部	白・ヨココナデ	良好	黄褐色	7/8	黑褐色	10YR	7/8	1-2mmの白色・深色砂 粒を多く含む	1-2mmの白色・深色砂 粒を多く含む	無田式土器
"	15	SA-3	壺	肩 部	白・ヨココナデ	良好	黄褐色	6/6	黑褐色	10YR	7/6	1-3mmの白色・深色砂粒 を多く含む	1-3mmの白色・深色砂粒 を多く含む	無田式土器
"	16	SA-2	壺	肩 部	白・ヨココナデ	良好	黄褐色	6/6	黑褐色	10YR	6/6	1-3mmの白色・深色砂粒 を多く含む	1-3mmの白色・深色砂粒 を多く含む	無田式土器
"	17	SA-2	壺	底 部	白・ヨココナデ	良好	黄褐色	7/6	黑褐色	10YR	6/4	1-3mmの白色砂粒を多く含む	1-3mmの白色砂粒を多く含む	無田式土器
"	18	SA-2	壺	底 部	白・ヨココナデ	良好	黄褐色	6/3	黑褐色	10YR	6/4	2-4mmの砂粒を多量に含 む	2-4mmの砂粒を多量に含 む	無田式土器
"	19	SA-2	壺	底 部	白・ヨココナデ	良好	黄褐色	6/2	黑褐色	7/5YR	7/6	1-3mmの白色・深色砂粒 を多く含む	1-3mmの白色・深色砂粒 を多く含む	無田式土器
第10圖	20	G-2	複合印文壺	肩 部	白・ヨココナデ	良好	黄褐色	7/3	黑褐色	10YR	7/4	1-2mmの白色・深色砂粒 を多く含む	1-2mmの白色・深色砂粒 を多く含む	無田式土器

第10回	21	G-4	茎	近部	ナデ	ナデ	良好	7.6	明眞褐色 (10YR 7/6)	2~4-mmの灰色・茶色砂粒 を多く含む	
〃	22	G-3	複合口被毛	口被毛部	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	6.4	1-mm程度の白色・灰褐色 を多く含む	外面上に3条の 筋模様	
〃	23	茎 基	複合口被毛	口被毛部	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	6.4	1-mm程度の白色・灰褐色 を多く含む	外面上に3条の 筋模様	
〃	24	G-6	長脚被毛	莖 部 下位	タチミガキ	ナデ	良好	6.4	1~3-mmの白色・灰褐色 を多く含む	外面上に3条の 筋模様	
〃	25	H-4	長脚被毛	莖 部	ナデ	ナデ	良好	6.4	1~3-mmの白色・灰褐色 を多く含む	外面上に3条の 筋模様	
〃	26	H-7	長脚被毛	莖 部 高	ミガキ	ナデ	良好	6.4	1~3-mmの白色・灰褐色 を多く含む	外面上に3条の 筋模様	
〃	27	I-7	茎 腹 部	ヨコナデ	ナデ	良好	6.4	1~3-mmの透明・白色・灰 褐色を多く含む	外面上に3条の 筋模様		
〃	28	G-2	蔓 完 形	口被毛部 下位	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	6.4	1~3-mmの透明・白色・灰 褐色を多く含む	外面上に3条の 筋模様	
〃	29	G-2	蔓	口被毛部 下位	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	6.4	1~3-mmの透明・白色・灰 褐色を多く含む	外面上に3条の 筋模様	
〃	30	G-4	茎 痘 部	口被毛部 下位	ヨコナデ	ナデ	良好	6.4	1~3-mmの透明・白色・灰 褐色を多く含む	外面上に3条の 筋模様	
〃	31	H-1区	茎 痘 部	口被毛部 下位	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	6.4	1~3-mmの透明・白色・灰 褐色を多く含む	外面上に3条の 筋模様	
〃	32	G-3区	茎 痘 部	口被毛部 下位	ヨコナデ	ナデ	良好	6.4	1~3-mmの透明・白色・灰 褐色を多く含む	外面上に3条の 筋模様	
〃	33	H-7区	茎 痘 部	口被毛部 下位	ヨコナデ	ナデ	良好	6.4	1~3-mmの透明・白色・灰 褐色を多く含む	外面上に3条の 筋模様	
〃	34	H-7区	茎 痘 部	口被毛部 下位	ヨコナデ	ナデ	良好	6.4	1~3-mmの透明・白色・灰 褐色を多く含む	外面上に3条の 筋模様	
〃	35	H-7区	茎 痘 部	口被毛部 下位	ヨコナデ	ナデ	良好	6.4	1~3-mmの透明・白色・灰 褐色を多く含む	外面上に3条の 筋模様	
〃	36	G-1区	茎 痘 部	口被毛部 下位	ヨコナデ	ナデ	良好	6.4	1~3-mmの透明・白色・灰 褐色を多く含む	外面上に3条の 筋模様	
第11回	37	H-1区	茎 痘 部	口被毛部 下位	ヨコナデ	ナデ	良好	6.4	1~3-mmの透明・白色・灰 褐色を多く含む	外面上に3条の 筋模様	
〃	38	H-1区	茎 痘 部	口被毛部 下位	ヨコナデ	ナデ	良好	6.4	1~3-mmの透明・白色・灰 褐色を多く含む	外面上に3条の 筋模様	
〃	39	G-2区	茎 痘 部	口被毛部 下位	ヨコナデ	ナデ	良好	6.4	1~3-mmの透明・白色・灰 褐色を多く含む	外面上に3条の 筋模様	
〃	40	G-2区	脚付枝	口被毛部	ヨコナデ	ナデ	良好	6.4	1~3-mmの透明・白色・灰 褐色を多く含む	外面上に3条の 筋模様	
〃	41	G-2区	脚付枝	口被毛部	ヨコナデ	ナデ	良好	6.4	1~3-mmの透明・白色・灰 褐色を多く含む	外面上に3条の 筋模様	
〃	42	H-3区	高木	口被毛部	ヨコナデ	ナデ	良好	6.4	1~3-mmの透明・白色・灰 褐色を多く含む	外面上に3条の 筋模様	

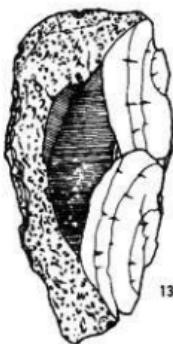
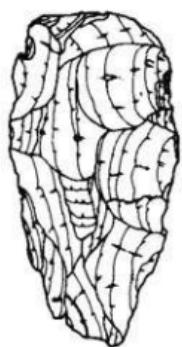
第1回	43	H-3区	高 壁	糊 糊	糊 糊	ナデ	糊	に近い褐色	に近い褐色	に近い褐色	に近い褐色	に近い褐色
"	44	H-3区	高 壁	糊 糊	糊 糊	ナデ・ミガキ	ナデ	糊	(7.5YR 5/4)	(7.5YR 6/3)	6/3)	6/3)
"	45	G-2区	高 壁	糊 糊	糊 糊	タテハケ①	ナデ	糊	(10Y R 7/3)	明黄褐色	1~2mmの白色・茶色砂粒	1~2mmの白色・茶色砂粒
"	46	H-3区	土 製	完 形	完 形	ナデ	ナデ	糊	(7.5YR 6/4)	糊	1~3mmの透明・灰色・黒 色砂粒を含む	1~3mmの透明・灰色・黒 色砂粒を含む
"	47	G-2区	"	完 形	完 形	ナデ	ナデ	糊	(10Y R 6/4)	に近い黃褐色	1~3mmの白色・茶色砂粒	1~3mmの白色・茶色砂粒
"	48	G-3区	"	完 形	完 形	ナデ	ナデ	糊	(7.5YR 6/8)	糊	1~3mmの透明・黑色砂粒	1~3mmの透明・黑色砂粒
"	49	H-2区	"	完 形	完 形	ナデ	ナデ	糊	(10Y R 5/4)	に近い黃褐色	2mm以下の中細砂粒を多く含む	2mm以下の中細砂粒を多く含む
"	50	H-1区	壁	底	底	ナデ	ナデ	糊	(10Y R 7/3)	明黄褐色	1~3mmの白色・茶色砂粒	1~3mmの白色・茶色砂粒
"	51	G-2区	壁	底	底	ナデ	ナデ	糊	(7.5YR 8/4)	に近い褐色	1~3mmの透明・白色・茶 色砂粒を含む	1~3mmの透明・白色・茶 色砂粒を含む
"	52	G-2区	壁	底	底	ナデ	ナデ	糊	(10Y R 7/6)	浅黃褐色	1~3mmの白色・灰色砂粒	1~3mmの白色・灰色砂粒
"	53	H-2区	壁	底	底	ナデ	ナデ	糊	(10Y R 8/4)	浅黃褐色	1~2mmの白色・茶色砂粒	1~2mmの白色・茶色砂粒
"	54	G-3区	壁	底	底	ナデ	ナデ	糊	(10Y R 8/4)	浅黃褐色	1~2mmの白色・黑色砂粒	1~2mmの白色・黑色砂粒
"	55	H-2区	壁	底	底	ナデ	ナデ	糊	(7.5YR 8/4)	浅黃褐色	2mm以下の透明・白色砂粒	2mm以下の透明・白色砂粒

### ③ 弥生時代の石器（第12・13図）

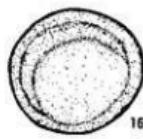
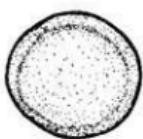
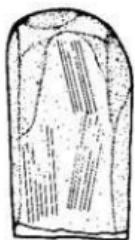
1～5は磨製石庖丁の完形及び破片である。1は、刃部の反対側に2箇所の抉りを有し、その両側が突出した特異な形態のものである。一方の突出部は欠損しているが、長径8.1cm、短径4.7cm、最大厚0.5cmを測る。刃部は丸みを帯びる平刃でその長さは、両側の斜めの刃部も入れて9.3cmである。下方の刃部は幅1mm程度の平坦面であり、両側の斜めの刃部が鋭利な刃先を有する。下方刃部には刃こぼれが目立つ。石材はディ岩である。2は2つの穿孔を有するタイプのもので粘板岩の破片を利用した完形品である。刃部は平刃で刃こぼれが目立つ。穿孔は一方からのみおこなっており、反対側は貫通時の剥落がそのまま残存する。長径7.4cm、短径4.4cm、最大厚0.55cmを測る。3は両側に抉りを持つ半磨製のもので、粘板岩の厚手の破片を利用している。刃部はやや丸みを持つ平刃であり、横位の研磨により鋭利な刃部をつくり出している。長径8.9cm、短径4.5cm、最大厚は1.1cmを測る。4・5は破片である。特に5は全体的に研磨が及んでおらず刃部も片面のみ研磨されているなど石庖丁作成中の欠損品ではないかと考えられる。石材は、4が粘板岩、5がディ岩である。7～13は磨製石鎌の完成品・欠損品・未製品である。7は穿孔を1つ有し、抉りの深いタイプのものである。刃部は両側よりていねいに研ぎ出し、抉り部分から脚部まで研ぎ出している。最大長4.4cm、最大幅2.2cm、最大厚0.4cm、穿孔径0.4cmを測る。石材は安山岩である。8は7より小型で、研ぎ出しある抉り部までは及んでいない。抉りの形状は弧状を呈し脚部先端も平坦である。刃部は2段に研ぎ出し鋭い刃部を作り出している。最大長2.5cm最大幅1.8cm、最大厚0.2cmを測り、石材はディ岩である。9は未製品で、一方の刃部とのバランスからみて、もう一方の刃部を作成する時に破損したものと考えられる。10は、完成品の欠損か作成中の破損かは不明である。2点ともに丸みを帯びた三角形に近い抉り部である。11も10と同様の破損部である。抉りはゆるやかな弧状を呈し、抉り部も研ぎ出している。また、中央に表裏面ともに抉り部より先端部へ凹部を研ぎ出しているのが特徴である。いずれも石材は粘板岩である。12・13は形状からみて磨製石鎌の研ぎ出し前の未製品と考えられる。剥片を調整して大まかな形を整え、さらに研磨によって、石鎌の輪郭を出し、刃部を研ぎ出すという工程が考えられる。14は最大長12cmの大型の横長の剥片である。片面を研磨しており石庖丁の未製品と考えられる。石材は粘板岩である。15は、砂岩製の砥石で断面は方形を呈する。実際に使用しているのは4面のうちの3面であり、1面は研磨痕を僅かに残すものの原縁面を残している。16は、扁平な円錐であるが、僅かに磨耗の痕跡がみられ、住居跡内より出土したこと等から、磨製石器の製作に関連する石器と考えられる。17は、粘板岩製の横長の剥片である。形状等からみて、石庖丁の素材と考えられる。



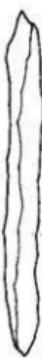
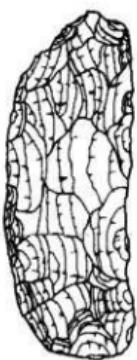
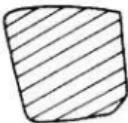
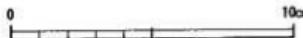
第12図 出土石器実測図(1)



13



16



15

第13図 出土石器実測図(2)

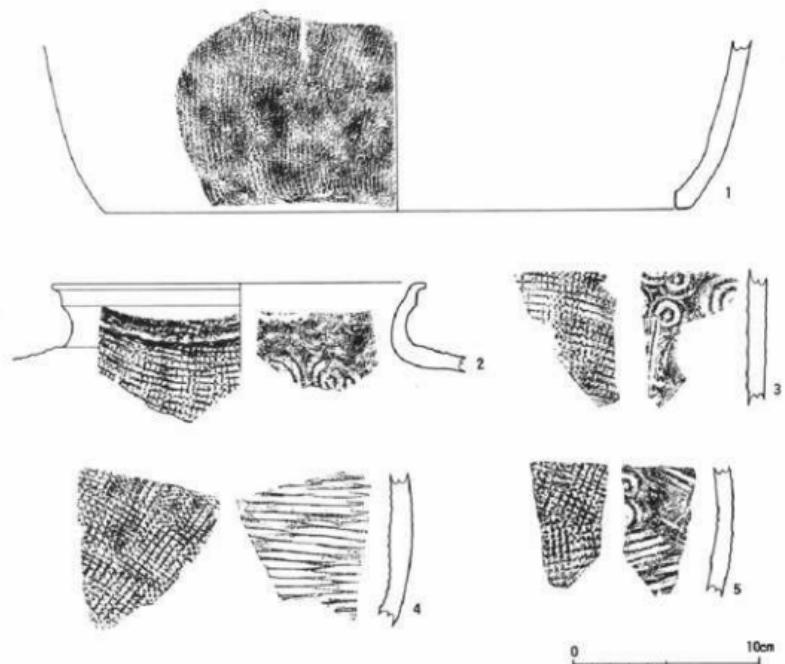
## 第5節 その他の時代の遺構と遺物（第14図）

### 遺構

遺構としては、第Ⅲ層（御池ボラ層）上面において、2条の溝状遺構と135箇所のピットが検出された。溝状遺構はG-H-5・6区にかけて東西方向に、またF-H-8～11区にかけて南北方向に延びており、遺物は出土していないものの埋土の状況・断面の形状等から判断して同一のものでF-7区（未発掘区）で結合していると考えられる。しかし、その性格・時期等については不明であった。また、ピットは内部よりの遺物の出土がなく、掘立柱の柱穴の配列として把握できるものもなかった。

### 遺物

遺物としては土師器4点・布痕土器2点・瓶1点・須恵器18点が出土している。土師器及び布痕土器は、小破片であり形狀・時期を明確に推定できるものはなかった。1の瓶は、底部の内径



第14図 その他の時代の遺物

が30.5cmを測り、底部より斜めに内湾しながら立ち上がる。外面はたて方向の粗いハケ目調整・内面は縦位の粗い調整の後に横位のナデ調整を施している。胎土は1~3mmの茶色・灰色・白色の砂粒を多量に含む。色調は外面がにぶい黄橙色、内面が黄橙色を呈し、焼成は良好である。2~5は須恵器の口縁部・頭部と胴部片である。2は口径19.8cmを測る壺口縁部である外面部に格子目タタキ、内面に同心円タタキ調整を施す。色調は外面が黄灰色、内面が黄褐色を呈する。3は、外面が格子目タタキ、内面が同心円タタキ調整で、色調は外面がにぶい黄褐色、内面が褐色を呈する。4は、外面が格子目タタキ、内面が平行タタキ調整で、色調は外面が黄灰色、内面が灰黄褐色を呈する。5は、外面に格子目タタキ、内面に同心円と平行タタキを施し、色調は外面が明黄褐色、内面がにぶい黄橙色を呈する。いずれも平安時代の遺物である。

## 第6節 小 結

都城盆地周辺部においては、御池ボラ層が1~3m堆積しており、御池ボラ層下の面的な調査はこれまで行なわれていない。しかし、近年の分布調査等によって早・前期の良好な包含層が確認され、遺物も表採されている。今回の面的な調査によってB地区では曾畠式土器が出土したのみであったが、A地区では遺構も確認されている。近年は、ゴルフ場等の大規模開発に伴なって御池ボラ層さらにはアカホヤ層下まで削平がおよぶ例が出てくることが予想され、その調査にあたっては、御池ボラ層下における面的な調査を十分考慮して行なう必要がある。また、市来式土器・孔列連点文土器についても、発掘調査による出土例としては前者が初見で後者が2例目と貴重な資料となった。

弥生時代においては、後期の突出壁を有する堅穴住居跡が2棟検出されたが、2棟ともに円形プランでありA地区の方形プランとは異なるものである。またB地区の2棟の住居跡間にも突出壁の形状・柱穴数等の差異がみられる。特にSA-2では免田式の長頸壺が出土しており、注目される。また、この住居跡は石器の工房跡としての可能性が強く、都城市祝吉遺跡のY-1号住居跡につぐ類例となった。祝吉遺跡Y-1号住居跡では、工房空間と食住空間が区別される傾向を指摘しているが、SA-2においても炉周辺部と壁際の空間とに2分される傾向がある。出土した石器のうち、穿孔のある磨製石鏃は石材が他と異なっており、搬入品と考えられ、またSA-2出土の抉り入りの磨製石庖丁やSA-3で出土した側刃に抉りの入った半磨製の石庖丁も周辺部に類例のないものであった。その他、SA-2とSA-3における柱穴数の差等は、石器工房を主とする住居跡と居住を主とする住居跡との機能差を反映していることも考えられる。

註 本郷泰道「祝吉遺跡」『都城市文化財調査報告書』第1集



全 景 (西から)



ボラ層下調査区



層 序



土 壤 (調査前)



調 査 風 景



土 壤 (調査後)

PL-2



SA-3 (調査前)



SA-2 (遺物出土状況)



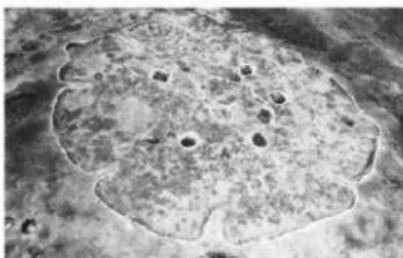
SA-3 (調査中)



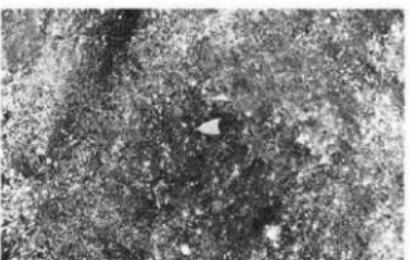
SA-2 (調査前)



SA-3 (調査後)



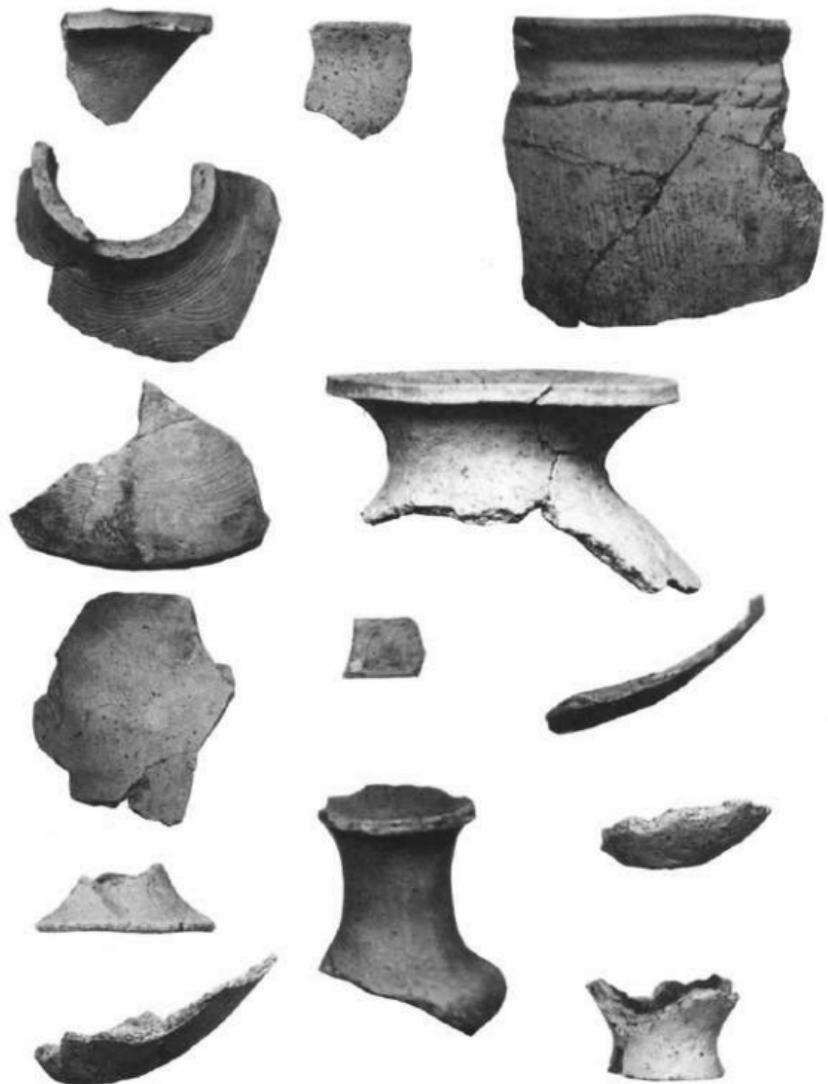
SA-2 (調査後)



遺物出土状況



縄文時代の土器



弥生時代の土器 (1)



弥生時代の土器 (2)



弥生時代の土器 (3)



弥生時代の石器



その他の時代の遺物

## 第V章 ま と め

城ヶ尾遺跡は、縄文前期の曾畠式土器、縄文後期後半の市来式土器・草野式土器、縄文晚期の黒色磨研土器・刻目突帯文土器、弥生時代後期の土器、平安時代の須恵器・土師器などが出土し、弥生時代後期の竪穴住居3軒・土壙8基と平安時代の掘立柱建物1棟が検出された。当遺跡は縄文前期から平安時代まで営まれているが、最盛期は弥生時代後期と平安時代である。

御池ボラ下層の黒色土層（粘質）から縄文時代前期の曾畠式土器の最後の段階のものが出土し、ピットなどの遺構が検出されたが、竪穴住居などの生活遺構は検出されなかった。アカホヤ層の下層の縄文時代早期以前は安全管理の面で調査できなかった。

御池ボラ上層からは縄文時代後期後半の貝殻文系の市来式と草野式の深鉢形土器のみが出土しており、それに伴って磨消縄文の鐘ヶ崎式土器が伴って出土している。遺構は検出されなかった。

縄文時代晚期前半の土器としては黒色磨研の浅鉢形土器が出土しているが、前半の最後の段階の土器である。遺構は検出されていない。

縄文時代晚期後半の土器としてはいわゆる夜白式土器と呼ばれる刻目突帯文の甕が出土しているが、土器量は少ない。また孔列土器が数点出土しており、深鉢形土器と刻目突帯文土器の両者に見られるが、孔列には未貫通と貫通の違いが見られる。県内では第III章第7節で述べたように9遺跡で出土しているが、遺構には伴っておらず、細かい時期及び共伴の土器の問題を含めて今後の調査の課題である。

検出された弥生時代後期の竪穴住居は、3軒の日向型間仕切り住居で、その内訳は円形プランを基調とするものが2軒と方形プランを基調とするものが1軒であり、すべてベッド状遺構を有していない。円形プランを基調とするものは突出壁を5以上有しているが、方形プランのものは突出壁を2有している。主柱穴は2号住居が5本に対して1号住居と3号住居は2本である。前者が第I B類に、後者が第IV B類に相当する。日向型間仕切り住居は県内においては越シ遺跡（日向市）を北限として、一つ瀬川下流域・大淀川下流域・大淀川上流域・清武川下流域・川内川上流域に分布しているが、大淀川上流域の当町からは初めてである。集落構成が日向型間仕切り住居のみか他の平面プランをも含むかについては、調査面積が狭かったために集落の全容を把握するまでには至らなかった。1号住居は長頸甕と甕から後期後葉に、2号住居は長頸甕とくの字口縁の頸部に刻目突帯を施した甕から後期後葉に、3号住居は口縁部に櫛描波状文を施した甕から後期後葉に比定される。3軒の竪穴住居から石庖丁が6点出土しているが、形態は多種多様である。特に2号住居から出土した石庖丁は刃部の反対側に2ヶ所の抉りを有し、その両側が突出しており、特異である。また両端に抉りを有する磨製の石庖丁も3号住居から出土している。県内では73遺跡で131個の石庖丁が出土しているが、その48.6%を抉り入り石庖丁が占めており、広

義の宮崎平野の海岸部に特に分布している。抉り入り石庖丁は大淀川上流域の都城盆地周辺にも分布する。第IV章第6節で述べられているように2号住居からは磨製の石庖丁・石礫の素材・木製品・剥片などが出土しており祝吉遺跡のY-1号住居で指摘された「工房」的性格の住居の可能性がある。重弧文土器は1号住居と2号住居から長頸壺が出土しており、2号住居出土の長頸壺は重弧を上下に施している。これらの重弧文土器は西健一郎氏分類の第4型式bに相当し、後期後葉の中段階に比定される。遺構には伴わなかったが、三段の重弧文と円形透かし穴を体部に施した器台も重弧を上下に施しており、類例は全くなく注目される。重弧文土器は県内では大淀川上流域と下流域、五ヶ瀬川上流域に分布しているが、当遺跡の重弧文土器は重弧を上下に施しており、加納遺跡（清武町）と黒追遺跡（宮崎市）に類例が見られ、大淀川上流域と下流域の特徴を備えている。また大荻遺跡（野尻町）では土壙墓の供献土器として重弧文土器が使用されているが、県内では住居に伴って出土する例としては初めてである。土壙が8基検出されているが、プランは不定形であり、性格は不明である。

平安時代の掘立柱建物1棟（2間×3間）が検出され、ヘラ切り底の土師器壺、高台付きの須恵器壺、布痕土器、瓶が出土した。高台付き壺とヘラ切り底土師器の形態及び布痕土器が共伴することから、9世紀後半を中心とする時期に比定される。

当遺跡の調査面積は狭かったが、御池ボラ下層で曾畠式土器が出土した点は重要であると共に、弥生時代後期と平安時代の遺構と遺物に多くの成果を上げることができた。弥生時代と平安時代の集落の一部を垣間見ることができたが、他地域との比較は今後の調査に期待される。

## 註

- (1) 長津宗重「日向型間仕切り住居研究序説」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第2集 宮崎県教育委員会 1985 なお下記の住居の分類はこの文献に従う。
- (2) 緒方博文「越シ遺跡」「龜崎土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」日向市教育委員会 1986
- (3) 北郷道「祝吉遺跡」『都城市文化財調査報告書』第1集 都城市教育委員会 1981
- (4) 西健一郎「重弧文長頸壺」「弥生文化の研究」4 雄山閣 1987
- (5) a 濑之口伝九郎・樋渡正男「日向の重弧文土器」『古代文化』第14巻第10号 1943  
b 石川恒太郎『宮崎県の考古学』吉川弘文館 1968
- (6) 註(5)aに同じ
- (7) 石川悦雄「日向における外来系の土器の伝播とその地域性(1)一瀬戸内・畿内系土器の流入とその展開」『宮崎県総合博物館研究紀要』第9号 宮崎県総合博物館 1984
- (8) 石川恒太郎他「大荻遺跡(1)」「特殊農地保全整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」宮崎県教育委員会 1974

高城町文化財調査報告書 第1集

城ヶ尾遺跡

発行年月 平成元年

発 行 高城町教育委員会

印 刷 有限会社 文昌堂